



MINI 76/77合併号 300円

鉄連仕事差別裁判 いよいよヤマ場に 22

この秋は男女平等法・労基法・国籍法・年金 23

EC 女性差別改善を各国に指示 22.

集会から「いまなぜ朝鮮人虐殺か」ほか 26

特集
女・「障害者」そして 3

優生保護法をめぐる全障連分科会の討論から

学校給食いま何が問題か あこら東海だより 28

語り合って夜を明かして あこら京都つうしん 30

あこら読書室に「れらはるせ」オープン 35

『子どもがあぶない』原稿大募集 36

＜女のつどい・女の講座＞

日	時	会	場
9月11日(日)	11:00~16:00	阿部宅 075-531-3089	当日1,500円
12:30~20:00	牛込公会堂 前売1,300円	当日1,500円	
13:00~16:00	問い合わせ 0425-511-1377	柴田	
10:30~12:00	日本看護協会 原宿館下車	徒歩8分	
12日(月)	18:00~21:00	喫茶の会 011-511-1377	
13日(火)	17:40~	一ツ橋ホール (日本教育会館)	
14日(水)			
16日(金)	13:00~15:30	神奈川県立婦人総合センター 0466-27-21111	
17日(土)	10:00~11:30	武蔵野文化センター 東上線志保駅3分	
13:00~17:00	東京都立川口社会教育会館		
14:00~16:00	東京YMCA 03-293-7011		
13:30~16:00	日本看護協会 400-8331		
13:30~16:30	参加費800円 神楽坂 東京都教育会館		
18:00~			
18:00~21:00	大阪なにわ会館 大阪上本町 06-772-1441		
18日(日)	11:30~15:00	総評会館 (新お茶の水)	
12:00~			
12:30~20:00	牛込公会堂 前売1,300円	当日1,500円	
14:00~16:00	茨野市大武公民館和室		
10:00~12:30	名古屋婦人公館		
13:00~	東京地域民生2号法廷		
22日(木)	18:00~	全電通会館 福岡の水	
13:00~			
18:00~			
18:30~21:00	茅ヶ崎市婦人センター (茅ヶ崎駅下車)		
24日(土)	18:00~	インテラセンター	
25日(日)	14:00~17:00	あこら読書室 03-354-9014	
27日(火)	10:00~	神奈川県立婦人総合センター	
28日(水)	18:30~20:30	主催の友会館 国産御茶の水下車	
30日(金)	18:00~		
10月1日(土)	10:00~15:00		
2日(日)	13:00~		
7日(金)	13:30~15:30		
9日(日)	13:30~		
11日(火)	18:30~20:30		
15日(土)	14:00~		
25日(火)	10:00~12:00		

女・「障害者」そして……

全国障害者解放運動連絡会議（全障連）
第8回全国大会医療分科会の記録から

優生保護法強化阻止をめぐって、「障害者」の側から強い反論が出ました。「産む産まないは女が決める」は「障害者抹殺」に通じる、と。——いくつかの地域でのトラブルに心を痛めた山口県連絡会のメンバー（そしてへあごらV会員でもある）、森川さん、志岐さんたちは、全障連に根拠強く働きかけ、医療分科会の今年のテーマに「優生保護法」がようやく取り上げられました。しかし7月30、31日の討論は、討論以前の問題の深さをすさまじく露呈して終わりました。その記録をここに活字にしてお届けします。はらわたをしぼり出すような「障害者」の声を紙面に再現できないのが残念ですが、これらの声を心の底に深く沈めて、それぞれの内なる優生思想を問い直さない限り、優生保護法撤廃は聞い得ないと思うからです。

第1日

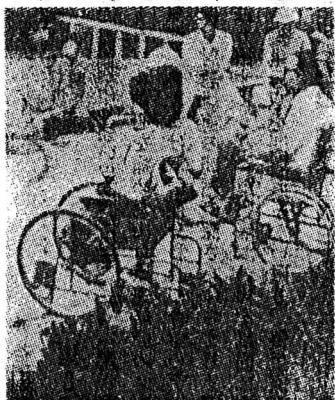
志岐（山口） このたびの全障連第8回の大
会に、優生保護法について討議できるような
場を設けてほしい、という要請を山口県連絡
会のほうからいたしましたので、その要請に応え
ていただき、論議できるようになったことを
感謝しています。全国いたるところで、「産
む・産まない」をめぐって、女性解放と障害
者解放がぶつかりあうというふうなことが起
きているなかで、まず、私たちは共闘しうる
んだ、という視点を持って闘わないとまずい
んじゃないか、ということを非常に危惧して
おりますので、ぜひこの視点で討論を進めて
いただきたいと思います。

栗山（福岡） 障害者の側からの優生保護法
への取り組みが遅れているということはある
んですけども、女性解放を闘っている方々に、
十年前から障害者グループと共闘してきた、
どうなのかということも、聞いてみたい。
ほくらにとつて優生保護法改悪っていうの
は、いったい何なのだろうと、非常に思う。
深めていきたいというふうにぼくは思う。
斎藤（82阻止連）産む・産まないは女の権利
と言う時に、「権利」という言葉だけがひと
り歩きさせられて、「殺す権利を要求する
のか」とか言って喜んでいるのは、自民党や生
長の家の人たちです。私たちを分断して喜ぶ
のは彼らなんです。
ですから、私たちは簡単にには言っちゃいま
えない言葉だと思います。そのへんを本当に時

間をかけてでも話していきたいと思います。
栗山 確かに、産む・産まないは女性の権利
だということ——、女性の方たちの言うて
おられるとおりなんですけれど、それを少し
変えて言う、例えば障害者の女性が子ども
を産んではいけない、部落の人たちが子ども
を産んで育てていけないという——そういうふ
うに変わる。堕胎という形だね。——いのち
いのちだと思ふんですよ、はっきり言って。
産めない状況があると言うけど、障害者に
は、もつとつらい状況があるわけですね。そ
れでも多くの障害者が、子どもを産んで育て
るということを一つの闘いとしてやっていると
いうことを、健康者の女解（女性解放）の人
たちはどう思っているのか。産めない状況が
あるから、障害者だから、だから堕ろすとい

う——。個別の事情なんかはあっても、自分らがつくった一つのいのちなんです。子どもをつくりたくなかったら、やることやらなきゃいいと思うし。今の社会じゃ産めないんだ、と言うならば、いつまでたっても子ども産めない。そういうこと言ったら、障害者なんてずっと——。重度障害者なんて機会もないし。米津（82阻止連） 私自身が軽度の「障害者」でもあるので、今まで話をしてきた女たちの立場と一緒の反面、気持ちには「障害者」という、ちょっとうまく説明できない立場です。

私は、女と一口に言っても、「障害者」の女と「健常者」の女では、こうあれと権力が要求してくる姿が違っていると思うんです。「健常者」の女は、子どもを産むべき存在として位置づけられているし、「障害者」の女は子どもを産むべきでない、産んではいけないというふうに位置づけられている。だから、「障害者」の女が、子どもを産むんだということを自分の闘いとして行なっていくというのは、その人にとって当然のことなんだだろうと思うし、それから、子どもを産むべきであると言われる「健常者」の女が、自分は産まない、子どもをもたない人生を選ぶのだということも、これは一つの闘いなんだと思います。



私たちは、産める状況がないから堕ろすのだということを言っているのではなくて、もちろん、産める状況がなくて堕ろさなければいけないという現実には確かにありますし、多くの場合、そういうことで堕ろすことは非常に多いんです。ですけれども、それ以前に、子どもを持つか持たないか、いつ持つか、ということは女が生きていくうえで、どういう生き方をしたいかというところ、どういふことを実現していくとでも大事なポイントです。

だから、産める状況があるかないか以前に、どういふ人生を生きていきたいかというとき、子どもを今は持ちたくないという状況なら子どもを持たないことを選んでいく。その手段としての中絶は、女にとって確保してお

かなければならない大切なことなんです。

さっき、子どもを産みたくないのならやることをやらなきゃいい、とおっしゃいましたけれど、やることをやっても、安全で女に負担のない避妊があれば、それはかなり防止できることなんです。この避妊の開発が、いつも女にとって負担である形でしか行なわれてこなかったということも私たちは批判していますし、安全な避妊の開発を要求しています。それでも人間のやることです。から100%ではなくて、本当に自分の子どもを持ちたくないというときの手段として中絶というものは女に確保されていなければいけないのだ、ということでは私たちは優生保護法の改悪に反対しているのです。

私は「健常者」であれ「障害者」であれ、男であれ女であれ、どういふ人生を生きたいかというのを決めていく基本的な権利があると思います。それは法律が認めるとか許すとかいう以前に、人間として皆が当然もっているものだと思うし、これを実現していくことが人間にとっての幸せだと思います。

だから、それを阻害する法律とか権力に対して闘っていくんであって、私は女も「障害者」も、共に生きあえる社会を実現していく

ために聞ていくんだと思うから、女が今は母親にはなりたくないんだというときには子どもを持たない、ということ、私はあくまでも主張していきたく思います。産むか産まないかということは、やはり女自身がどういう人生を生きたいかということのうえで選び、決めていくものだと思っています。

●「障害者」には選択の自由はない

とみなが(？) 産む・産まないは女性の権利だと思っしやいますけど、重度障害者の場合、施設や養護学校で、子宮をとったり、生理をなくしたり、されることが多いんです。あなたの考えなんて——、重度障害者に子どもを産む・産まない権利があるなんて——。生理をなくす手術をしたら、子どもを産めない体になる。ここに根本的な問題があると思うんです。あなたはこういうことをどう思っているんですか。意見を聞かせて下さい。栗山 ぼくも聞きたいことがあります。ぼくは生長の家ではないけれど、おなかの中の子どももいのちだと思ふ。それを親の都合で、中絶の権利だけ残しておくのには、はっきり言って疑問を感じます。

米津 施設の中で女性の「障害者」が子宮を

とられてしまうということは、「障害者」の女は産むべきではないということの最もひどいあらわれで、本当にひどい暴力だと思えます。くり返したくなりますが、「障害者」の女は産むべきではないということの反対側に、「健常者」の女は産むべきだと位置づけられるとき、「障害者」の女が子宮をとられてしまうのがひどい暴力だということと同じように、今、産みたくないと思っている健康な女が、子どもを産むべきだと言われて産まされるということも同じように暴力なんだ、ということとを理解してほしいんです。

それから、おなかの中の子のいのちの問題はとても難しく、私はとても一言では答えられないんですけれども、生物として人間が生きていけば、どこかでいのちのちが対立して、ぎりぎりのところでどちらか生きられないという現実を、男であれ女であれ皆かかえていて、基調(医療分科会基調報告)にもあるように、女が障害者殺しの先兵とさせられているという、こういう状況の中で、女に対する、また障害者に対する政策の中で、女は中絶をしているという、そのことをぬきに、いのちの問題だけを切り上げて言うことはできないんじゃないかと思ひます。

それから、いのちの問題をどうするんだというところがいつも女にだけ問われてしまうのは、とてもつらいんだということを言いたいと思います。子どもができるということは、男と女が一緒になってつくるんです。さらにそれは個人的なことだけではなくて、人類としての問題として子どもというのはできてくるものなんです。それを女だけに問われたらとてもつらいし、中絶する女はいつもそれをつきつけられながら、それを引き受けてやってるんだということを、うまく言えないけれど、私は言いたいと思います。

私が確認したいのは、「障害者」の女の子宮を取ること、それから「健全な」女に子どもを産ませること、それは本来に一つの根っこから出てきているもので、優生保護法を改悪し、母子保健法を改悪し、障害者福祉法を改悪しようとしている、一つの根っこから出てきているものです。「健康な」女を母性としてだけ捉えて、「障害者」の女から母性を剝奪していくってことは、男を労働力としてしか見ないというのと全く同じことです。それぞれ一つの根から出てるんだということを確認して、どうやって、その悪い動きを、一緒に力を合わせて止めることができるかと

いうのを議論していききたいと思ひます。

●ボクはお母様にクビを絞められかけた

川本(山口) ちよっと、ぼくの個人的な体験を言つてみたいと思ひます。

ぼくが四つ頃の頃ね、おふくろに——何度か殺されかけたことが、あるんですよ。ぼくのお母様は「健全者」で、これまでも、今も「健全者」です。そういう「障害児」をもつたら殺してやりたい気持ちつてのがね、自分の身内になると、すごく憎くなつて、介護なんかすごく日常的になるし「じゃまくさい、えーい、殺してしまえ」みたいな気持ちつてのが、だんだん出てくる。それがいろんな形で表われ、端的に言えば障害児殺しとかになる。そういうのが優生思想の、「健全者」がもつ優生思想の表われだと思ひんですよ。

女性と「障害者」の連帯つていうのも、そういうのお互いに深めない限りはね、ぼくらとしては、「障害者」としてはもう、一緒にやれないんじゃないか、という限界というのを、常々感じてゐるんです。

それで、今は、改悪だとか女性解放の人たちは言うんだけど、今は改悪じゃなくつて、ぼくらは、もうどうでも生まれてゐるんだ

しね、殺されようとしてゐるんだつて。ずつと優生保護法がある限りね、ぼくらつてのは、そういう関係におかれてるし。

優生思想を根絶するには、ひとりひとりの煮つめつてのが絶対に必要だと思ひます。志岐 今おつじやつたことをとても重要だと思ひます。いつも女性解放と障害者解放が、殺す側と殺される側というふうに対立してしまふのはなぜなのか、私もずつと問い続けてゐるんです。

やはり、殺す側に女も加担させられてゐるんですが、「障害児」と親子心中してしまふときに父親と心中するのは本當にまれで、なぜ、あれほどの母親が心中していくのかと言つたとき、いわゆる家制度の中で、親戚中から、お前が「障害児」を産んだんだからと責められて、日常的な介護を強要されて、精も根もつき果てて死に追ひ込まれていく母親たちがいると思ひんです。

だから、子殺しにまで女が加担させられてゐるんだという、女が自ら望んでやつてゐる人ではなくて、本當に長い歴史の中からそこまで追ひ込まれてきてゐるんだという視点だけは持つておかないと、双方がいがみあつて、共闘できないんじゃないかと思ひんです。

だから、突きつけられ方としては、自分の中にある優生思想つてのを見つめたいと思ひけれども、そこを言うあまりに、女の置かれてゐる状況が見えにくくなつてゐるんじゃないかという気がしてならないんですが。

女(大阪) 「障害者」はずつといやがられてきたんや。みんなの話を聞いてゐると、それがよくわかる。「障害者」は体でね、知つてゐる。なんでかいうたら、「障害者」いっぱい殺されていったんや。

私、部落の「障害者」ですけど、部落とか貧困の家で、どうしようもない貧乏人の多い部落で、それだけで差別的な見方されてきた。女の生き方とかいろいろ言われてるけど、もつと現実を知つてほしい。かあちゃん、とうちゃん、病氣になつて、おとむらいにもいけない。おなかの子が「障害者」かもしれないと言われたとき、(あなたたちは)ほんとうに産むんか。自分に責任持つてや！ 自分が産んだ子どもには、自分が責任持つてや！ 女解の人たちは、どれだけやつてきたんかというこなんや。気楽な——、「障害児」育てていけるのんかという——、瀬戸際に殺すことあるんか？

私は子ども産んで育てていききたいと思つて

るけど、病院行ったら、あれやこれや言うんや。「それでええんか」て。検査する前からやで。「障害者殺すんは、根本的なところで優生保護法や。「障害者」は自分自身に誇り持ってやで、今までの怒りと闘いてな、変えていくねん。」(大拍手)

男(?) さっきから女性の立場、女性の立場って言うけど、その女性の立場の中に「障害者」の女は入っとるんね。部落のちゃんたちのことは入っとるんね。子どもいっばい産んで「生けんめい育てていって女のことが入っとるんね。

女性解放というなら、部落の母ちゃんとか障害者の女の子とかひっくるめて「女」と言い切らんと女性解放にならんや。(拍手)

● 殺す側は「女」だ!

女(?) 女性解放の人たちは、産む状況でないから堕ろすとか、社会のせいにしてしまいうすぎると思います。私は、まだ医者には行っていないけど、まず妊娠してると思う。私は「障害者」だけど「健常者」を産みたいとか「障害者」を産みたいとかは私にはない。私は、私と、私の男の間の子どもが欲しいだけ。「産む、産まないは女の権利」とおっしゃ

いましたが、男と女のセックスでも、「障害者」は男と女が出会う機会が少ない。施設、学校には男はいても、社会に出たら、結婚したいと思っても、経済的に大変とか、障害があるからとか、家族の反対とか、なかなか「障害者」の性というものをもう少し理解してほしいと思う。

それからやっぱり、女性解放と障害者解放は、私は、明らかに差別する側とされる側、つまり、私らは常に殺される側である——それに憤りを感じます。

私の母親も、私を絞め殺そうとしたのは事実です。でも、彼女は心中しようとはしなかった。やっぱり、殺される側は「障害者」で、殺す側は女性だと思います。(声援、大拍手) 斉藤(あごら) 女の運動をしている一人です。さっきからお話をうかがっていて、胸がつぶれるような気持ちになりました。どういうふうに話したらいいのかわからなくて、涙だけが出てきます。

「障害者」の側の問題の重さに、自分の中の言葉がどんどん凍っていく、死んでいくのを感じます。私たちがどれだけそれを知っていたかということを、改めて深く恥じ入ります。それでもあえて言いたい。なぜそんなに

憎み合わなければならぬのでしょうか。それは権力の側の思うつぼにはまることにならぬのではないのでしょうか。

私たちは「優生保護法改悪反対」というスローガンに掲げていません。私たちは優生保護法そのものに反対し続けています。このように恐ろしい法律が戦後も引き継がれ、戦後38年もたった今でも存続していることに驚きと怒りを禁じ得ませんし、どんなことがあっても、この法律そのものをなくしたいと思っています。優生保護法は中絶法ではありません。39条の条文の37条が優生法で、中絶に関するのは2条にすぎません。しかも第1条の「目的」に、「不良な者」として「障害者」を規定している。このような法律があるというところが、世の中の障害者差別を基本的に支えている。この法律が続く限り、障害者差別は強化されていくでしょう。

こうした背景の中で、いま現実に障害者差別が厳存している。「障害者」の方々が、女に何がわかるかとおっしゃる気持ちもよくわかります。私たちは2本の足で歩き、両耳で聞き、両眼で見、口で自由にものを言う。この会場に入ったときから、私は何か罪に似た気持ちさえおぼえました。しかし、私たちが

職場で得る給料は男の半分です。(働けるじゃないか!)の野次)たしかに私たちはそれでも働ける。しかし程度の差こそあれ、差別され、抑圧されているのは事実です。私は、抑圧されている人間ほど、他者を抑圧する存在になりやすいものはないと思う。「障害児」を殺そうとした母は、彼女自身の抑圧をはねのけていかないかぎり他者を殺す存在になるでしょう。私たちはそういう意味で女の解放を聞いているのであって、その根っこは本当に一緒にいなければならぬのしり合ったりしなければならぬのです。

(一緒にじゃない! わかっちゃない! など野次ますます激しくなる)

司会 もう少し話を聞きましょう。

斎藤 私は優生保護法の歴史を調べてみました。この法律はナチスドイツの断種法をまねたものと言われてますが、調べてみるとそうではありませんでした。優生思想は歴史始まって以来ある。それが特に1930年代の世界的な戦争準備の中で公認され、世界各国に優生保護法がつくられている。ナチスドイツは欧米諸国の中ではむしろ一番遅れて法制化し、それを人種差別、ユダヤ人抹殺に利用したわけです。その手本はアメリカで、20世紀

の初めから法制化し、インディアンや黒人、ブルトリコ人などの抹殺に利用した。優生思想は障害者差別だけでなく、「劣った」人種、「劣った」民族、「劣った」性を差別する基本的な思想になっている。まさに「異種異形のもの」に対する差別です。日本ではそれが特に障害者差別、病者差別に利用された。障害者よりもっと前にハンセン氏病の患者に断種が行なわれていました。その実数を積み重ねる中で、欠陥のある者には断種するのが当然という思想がづちかわれてきた。戦争を遂行する国力をつくるためには「劣った」者を減らすのは当然という考えがだんだんつくられてきた。それでも国民優生法は議會をすんなり通ったわけではなく、ぎりぎりまで大反対があった。最後にその反対を押し切るこ

とになったのは、精神障害者が出た家系は忌まれ、家族まで自殺するほかにないという現状を切々と訴えた演説に共感する人が多かったからです。「障害者」を殺したの世の中全体ではないですか。「障害者」を「劣った」者と思い、「障害者」がいることが「不幸」だと思ふ世の中の基本的考え方を変えないかぎり「障害者」は殺され続けるでしょう。この支柱となっている優生保護法を、あらゆる

力をつくして撤廃していきたいと思います。あなたの方の言葉を聞くと、私は言葉がなくなってしまう。けれど、そこまであなた方を追いつめているものに、一緒に聞きたい。一緒に聞かないかぎりどうして私たちの状況を変えることができるでしょう。(拍手)

林(大阪) さっきからの話を聞いていて思ったのですが、「障害者」と「女」の状況はそんなに違うのでしょうか。友人が籍を入れないで子どもを産もうとしたら、さっき話に出た「障害者」の方と全く同じ扱いを受けました。結婚して女と結婚しない女では大きな差別があります。女と男が一对一の関係をつくるべきだというのはそのとおりだと思いますが、現実には組合活動をしてる男でさえ一对一の関係を喜ばない。(甘ったれたことを言うな! など、激しい野次) 施設で「障害者」の女が職員にはちまされ、墮ろさせられたという話を聞いたことがあります。障害者であり女であるという二重の差別の中でそういうことが行なわれたと思う。一对一の男と女の関係の中で子どもが生まれることが理想ですが、現実には強姦や売春の結果として産まなければならなかった女も多いし、男に捨てられたために子を捨てた女も多い。そ

ういう現実をきっちりとみつめないで、いつまでも運動がふくらまないと、分断されていることになると思います。

女(？)。「障害者」には働く場もないし、男と出会う場もないのです。結婚したり就職したりしている女性に「障害者」の気持ちはどうしてわかりますか。(賛成のうなずき多し)

川本 さっきばくが優生思想が結集軸だと書いたのは、女性解放と障害者解放を分断しようという意味で言ったんじゃないんです。

女性解放の中に優生思想つてのを入れない限りは、この優生保護法というのは聞えない。絶対聞えない。なんでかと言うと、優生思想が根底にあるから。

だから、頭の中でごちゃごちゃごちゃごちゃ優生思想を考えただけでは話にならない。「障害者」と本当に一緒に生活する中で、いろんなこと感じる中で、「障害者」も「健全者」もいろんなこと言い合える中で、はじめで自分はこういう考え持ってたか、どういう優生思想があるかって、自分の中に感じるものや。それがないと全然話にならないわけ。だからぼくは、女性解放を闘ってる皆さん方に言いたいのは、その優生思想つてのを自分

の中で問題にして、どういう風に運動の中で活かしているかというのを考えてほしい。そこそこをよろしく願います。

●あんなたちは「障害者」を産める？

女(？) 皆さんの話を聞いてて私はやっぱり腹がたった。産む・産まないは女の権利だとか、自分の人生の中で子どもを産むことを考えていきたいとか、いろいろ討論の中で出ましたけれど、やっぱり、皆さんは忘れてると思う。「障害者」が「健全者」のように、自分で自分の生き方を、今まで一度だって決めてこなかったんだということ。

言いたいんだけど、じゃあ、あなたのおなかの中に「障害者」がいるかもわからないと言われたらね、「健全者」の女の何人が産んでいけるか。優生保護法が、現実には「障害者」を抹殺していることをもっと知ってほしい。ここは医療の分科会だけど、医療の現場で何が行なわれているか知ってほしい。(同意の野次多く騒然)

志岐 さっき斉藤さんが本当に切ない思いでなぜこれほどまでに対立し合わなければならぬのかということをやったの

だけど、「障害者」の女の方も、子どもを望むせと言われるとき、自分の人生は自分で選びとりたいと思っていらっしゃるんだと思います。そのことと、米津さんが「自分の人生は自分でつかみとるんだ」とおっしゃったことと違うことなんでしょうか。女が自分で決めるということは、すなわち、「障害者」の女が、産むことを、施設の職員が決めるんでもない、周りが決めるんでもない、世間が決めるんでもない、ましてや国家権力が介入するんでもない、そういうものに對してノーと言うことにつながるんじゃないでしょうか。

「障害者」の女が生きていることをすべて否定されているのに、健全者は自分に決定権があると言われたけど、差別のある社会の中で生きている点では同じじゃないでしょうか。そして、男も今の階級社会の中で抑圧されていると思います。だから私たちは男を敵に回すんじゃない、共闘しながら差別社会の構造を変えるために闘っていきたい。さっき斉藤さんが女の賃金は男の半分だとおっしゃったときに、思わず「私たちにどれだけ労働の場が開かれているのか」とおっしゃったのですが、(わかってない……など、野次騒然、志岐さん発言を中止)

女(広島) 広島でもずっと「障害者」と女がいかに対立するかといった非生産的な議論ばかり続けていますが、「対立させられる」とか「憎み合ひさせられる」とか「障害者」と自分とを違う世界で語ってらっしゃるんですよ。それだけ衝撃を受けたのなら、なんで「障害者」の女性と一緒に状況を切り開くというところに話が進んでいけないで、なぜ「対立させられる」とか、「それが悲しい」とか、しほんでいく話になるのか、それがわからない。

●ちょっと目を離したスキに

竹内(北陸) 軽い障害を持っていますが、「健常者」です。今までの話の中で、実際の問題を討議してないんじゃないか、という気がものすごくするんです。たとえば私の相手はいま横にいる彼女(車いすの人)ですが、一緒に産婦人科とかに何度も行きました。そこで医療従事者がどういう対応をするのかをどれだけの人が踏まえながら話してるか、ものすごく大きい問題だと思ふ。さっき誰かが「殺す側の立場も考えなければいけない」と言っただけで、基調(報告)にも書いてあるけど、産婦人科なんかでも「すこやかな子ど

もを産み」という治療をやってるわけですよ。それに対し、何の怒りも感じずにみんな受けてるわけです。去年岡山大会のとき話したことです。ぼくの彼女に産後何週目かに代慰異常のチェックを医者側が言ってきた。「これは強制ではないのだけど」と言いながら半ば強制的にやるわけです。看護婦までが「なぜチェックしないのか」と言ってくる。その中ではつきりしているのは、すこやかな子どもが生まれるのがあたりまえだというのがみんなしみついているということです。

「障害者」抹殺の記事なんか新聞にもあふれています。みんなどれだけわかってるのかなという気がものすごくするんです。さっき脳性マヒの人が齒科医で苦勞をするという話をしたけれど、脳性マヒのことを頭では知っていても実際にはほとんど知らずにひどい対応をするわけです。産婦人科でも、籍を入れていても堕ろすように示唆するんです。ぼくも彼女から10分くらい離れたら、その間に医者と看護婦があつちに行けこつちに行けという感じでしゃべるひまも与えずにパーッとやめた。言語障害もあるし、何か言うこともできないうちにやっつて、後で「ほかの産婦人科医は本当に産めと言ったんですか」と言う。

ものすごい優生思想があるわけです。そういう一つ一つについて、どれだけ「障害者」の人と格闘しながらやっついていけるのかということ。そこでやれなかったら、理屈でわかる方が何だろが簡単に負けちゃうんです。力と専門性をかざしてやってくるんです。これに対してどれだけの人間が本当に怒りをもって対決していけるのか、これはぼく自身も問われていることだと思ふが……。そういう実体としてしみついている差別をどれだけわかっていけるのか。「健常者」の側は苦しみもしないで「障害者」を殺す側に立ってきただけです。それについて全く踏まえぬ議論をしても意味がない。今までの討論で意味があるとしたら、「障害者」の側からの、自分たちが殺されてきたから、現実についてものすごく敏感に反応し、生き抜いてきたことに誇りと怒りをもって全国の「障害者」が結集してるんだという発言を「健全者」が受け止めて、理屈でなく実態に一人一人がぶつかっていくことだと思います。そうしない限り年1回の論議の機会の意味がない。そういうふうに話を煮詰めていきたいと思ふ。

栗山「「障害者」の女たちが、何か月検診、何か月検診という形で、子どもを堕ろせと迫

られてゐる現実を知つてほしいと思います。同時に、「あなたの子どもは「障害者」らしい」と言われたときに、「健常者」の女たちがどんなふうに反応するが、思い起こしてほしい。女性解放運動をやつてゐる人たちと障害者運動をやつてゐる人たちが、一度徹底的にボクネをさらけ出したとき、対立が共闘に変わっていくと思う。女性解放運動をやつてゐる人たちが、もっと障害者差別に目を向けてほしいが、つたから、ぼくはあえてこういう問題提起をしたのです。あいまいな形では終わらせたくない。10年前と同じことを繰り返したくないのです。体制が悪いとか国家が悪いとかは誰でも言えますが、それだけでは何も生まれません。もう一回考えてほしい。(拍手)

●声を心にひびかせよう

司会 では最後に一言どうしても言いたいという方どうぞ。……女(日野市) 明日の討論で優生保護法のことをつめていただきたいと思ひます。憲法改悪との関連も明らかにしてほしい。きょう「障害者」の方々から、すこやかな子を産めと言われることの問題が提起されたけれども、これは憲法改悪につながると思ひます。日

野市では母子保健法の具体化として保健センターをつくるうとしていますが、そういう中で優生保護闘争の質的な変化が考えられます。女性解放と障害者解放の共闘はまだなかなか難しいと思いますが、権力側からの攻撃が非常に早いテンポで進められてゐる現実に対し有効に反撃していく方法を具体的に考えたいと思ひます。

斎藤 さっき大変長い時間を与えて頂きながら、本当に何も言えなかったと自省しています。私たちに何ができるか、あれからずっと考えていたのですが、私に何かできることがあるとしたら、きょう話されたことを、胸を切り裂き切り裂き、はらわたを引きちぎり引きちぎり、我が胸に問い直すこと以外ないような気がしています。皆さん方の言葉の百万トン級の重さに比べれば、私の言葉は1グラムにもならない。百万トン級の言葉を突きつけられると私たちは言葉を失つてしまひますが、きょう1グラムの言葉を、明日は2グラムにして、何とか一緒にやっていきたいと思ひます。

きょう、私が、「女」であるということ、
「健常者」であるということ、女解放をやつてゐるということ、憎しみの目を向け

れ、ののしり声を浴びせられたことを、私は忘れない。それをきつちりと受け止めていきたい。多分私の中に優生思想があるからこそ、そのような攻撃を受けたのだと思ひます。それを突き破らない限り、「優生思想と闘つていけない」と心にしみて思ひます。

米津 「障害者」が置かれてゐる現状を女がもっと知らなければいけないというのは、本当にそうだと思いますが、「女」「障害者」そして「男」の置かれてゐる構造を「障害者」の側でも考えてほしいという感想をもちました。

阻止連は優生保護法撤廃、堕胎罪撤廃を目指して闘つてゐるわけだけれども、優生保護法改悪を許してしまつたら、私たちはもっと分断されてしまふので、撤廃をちとるためにも改悪は絶対に阻止していかなくては、と思ひます。この秋にまた上程が予定されています。女と「障害者」が同じ行動をとれないにしても、少しでもできる形であらゆる力を結集していきたいと思ひます。

テイチン参加者募集

次号「子どもがあぶない」に参加希望の方、あなたの主張を書いてお申し込みを。(謝礼は出ません)

第 2 日

司会 今日日は、全国各地の取り組みの紹介を順番にやります。所属と名前を言ってから発言ねがいます。

栗山（刑法改悪と保安処分新設に反対する福岡活動者会議） 福岡では、過去3年間に女性の出産が3度あったが、そのつど（「障害者」を排除しない）医療労働者を捜し求め、幾人かの信頼できる医療労働者をつくり出してきました。

6月26日付毎日新聞に、徳島医大で、30年前に80人以上の精神障害者に対して人体実験を行なったと報道していたので、調査したら、実際に人体実験を使った研究で学位論文を得た人が、福岡県の精神衛生審議会の会長をやっていることがわかったので、今後はこの問題と取り組んでいきたいと思っています。

川本（山口） 山口では、施設の「障害者」が、身体に合った治療ではなく、抗てんかん剤ではないかと思うが、体の力が抜けるような薬をどんどん飲まされていることに關して、まだ討論の段階だが、問題にしている。また出産もあったりで、医療をめぐる問題は

たくさんあります。

長谷川（山口） 昨年、女性「障害者」が出産し、医者通いをしたが、山口では日赤でスミーズに受け容れられました。優生保護法問題も討論しています。

たさか（岡山） 個人参加です。民間の精神病院に勤務しているが、精神医療を改善することは難しい。病院や医療の世界は非常に古く、縦構造であり、医者を頂点として職員が続き、一番下に患者がいます。医師の指示に従って動かなければならず、加害者としての立場にいたり、患者さんと一緒の所にいたり、苦慮しているが、何とか良くしていきたいと思っています。金もうけのために、注射や薬、患者管理、電気ショックなど、必要ないと思われるような治療も行なわれています。組合はあるが、医療労働者としての生活には関心があっても、患者さんと職員がどのような関係を持っていくのかは語られません。患者さんには無関心で疑問も感じていない。私は組合の役員をやっているが、考える場を設定するのも難しいことです。内部告発というのは、運動としては続かないので良くないと思うが、その形でしか問題提起できないのです。外側から病院を包囲し、患者さんの中

心としながら、長い展望をもって運動を作り出してゆきたいと思っています。

中村（東京） 私が考えているのは精神医療保安処分の問題です。昨年1年間はハクラバさんの救援会に出た。自分自身、覚醒剤を飲んだようで、錯覚におちいっているようで、病気がどうかはふれたくない。現実が存在する病気は、社会的、階級的な抑圧、ひずみなのだと思うが、（それをなくすために）思考や教育を追求してみても、理解できない人が大半なのだから、それより現実を見ることが大切だ。公立、私立、大学病院にしても、医者の数が足りない。私は現実を見ながら、自分自身を大切にするような運動をやりたいと思います。

まなか（千葉） 前に「障害者」解放の人々と女性解放との交流会があつて出席しました。が、優生保護法に対して、「障害者」は優生思想に反対し、女性は、産むことを国に決められることに反対しました。その時も意見はかみ合わず、「障害者」を産まないことを決めるのか、との意見が「障害者」から出され、そうではない、と女性たちは言いました。優生保護法に対してはどちらも反対しているのだから、共通点を考えたいと思って来ました。

庄司（千葉） 地域で暮らす「障害者」の介護に入っています。結婚し子供がいる「障害者」の人たちと出産や育児を考えています。優生保護法については、「障害者」も女性も「不当だ」「いけない」「おかしい」というところでも共通しているのだから、意見は違っても共闘すべきだと思います。私は個人として、女性問題と「障害者」問題の、どちらの面からも考えていきたいと思っています。さかい（仙台） 少しだけ介護をやっています。大学に入るまでは、「障害者」をめぐる状況や実態は全然わからなかった。各地の「障害者」の人が、どんな医療差別を悩み、怒っているのか知りたくて来ました。今橋（山口県教組） 教組の組織参加です。教育労働運動、就学運動、統合保育・教育、住民運動をやっています。自己否定と解体、そのプロセスがずっとあって、その両極にあるのが創造と解放だと思います。全共闘世代が全体として退潮している中で、若い人々と一緒にやることのシンドラサを思っています。昨夜、この分科会のなりゆきに注目している『福祉労働』の渡辺鋭気、「都教組」の北村小夜、「東大小児科」の石川憲彦、「たとえ障害児教育」の山口氏らと話し合ったが、

もう少し議論のかみ合う部分とかみ合わない部分を鮮明にしていいたのではないかと。問題は二つあるのではなく、一つだと思っています。仕掛けられている攻撃としての優保、母子保健法、保安処分、それから、体外授精等、科学技術という名の人体実験の成功例に対して、こちらの戦線の政治日程をつめるべきではないかと思っています。全障連の責任において、これらの問題に関する共通のテーブル、土俵を設定し、恒常的な議論を重ねる場をつくるべきだと考えます。

こたに（八王子） 八王子、日野市で八優生保護法改悪に反対する南多摩女たちの会Vを作って、集会や「優生思想について」「母子保健法」等の学習会をしてきました。国会上程阻止の後、自民党は、女性が産みやすいようにと保育等の条件を整備すべきだと言っているが、それに対して今後どうすべきか話し合っています。市議会陳情も、今後は優生思想そのものや堕胎罪を前面に出して問題にすべきでしょう。「障害者」と女性が連帯することは、すつきりとはできそうにないが、いろいろと考えてやっていきたいと思っています。宮城（『福祉労働』編集部） 自分が女であること、部落解放運動をずっとやってきたこ

とからこの分科会に参加しました。よく「障害児」殺しや、心中事件があったりすると、圧倒的に母親に対する同情の投書などが集まったりするが、それは健全者の優生思想がなせることだと知人の「障害者」から聞かされ、私もそう思います。昨日、山口の川本さんが「なぜ女性解放が聞えないか」というと、根底に優生思想があるからだと言ったが、私の胸につき刺さった言葉でした。徹底的に、明からさまに、ホンネを言い合って共通点を見つけ、一緒にやれるところを見つけないと思っています。

浜田（医療社会推進会議） 私たちは、現在の医療の問題の根本は、点数出来高払いによるもうけ主義にあると思っています。推進会議は、医療被害にあった者、公立病院の医者、医療従事者等で組織されています。今回はじめて参加しましたが、全障連が現在の医療をどのように考えているのか、機関紙で紹介するために参加しました。（マイクの故障で後半は聞き取れず）

うめだ（仙台） 重度軽度の精神薄弱者の施設を訪問するサークルに入っています。施設は、いなかにあるので、大きな病院はなく、施設内で施設側に都合の良い閉鎖的な医療が

なされていることが問題だと思ひます。

林田（京都） 精神病院に入院中の人の訪問活動をしています。「何のために来ましたか」「なぜ僕の所に来ましたか」「長生きするにはどうしたらいいですか」等の質問をとおして対話します。在宅の人の場合は、近所の人が、「お母さんにもしものことがあつたら精神病院に入つてもらふ」と言つたりする状況があります。また、6月には、病院で多量の薬を飲まされ、1週間くらいぐつたりとしていた人もいました。（マイクなしのため、聞きとれず……）

井上（優生保護法改悪に反対する大田区の会）地元で全障連大会が開かれるということで、実行委員会に参加しています。昨日の討論では、女性解放と「障害者」解放が対立し、「女性は自己批判してから来い」ということだったが、全身麻酔をして中絶手術を受けなければならぬ女性を、どうして責めなければならぬのだらう、と思ひます。共闘して、共通の敵に向かうべきです。また優生保護法そのものの撤廃を、ここで確認してほしいと思ひます。

門田（北九州・森永告発） 食品や薬品が、「障害者」の生命を短くするのは、妊娠中

の母体にも影響あるし、やっぱり（聞きとれず……）医療公書を告発していきながら「障害者」の権利を守つていきたいと思ひます。森永の被害者は、いまだにリウマチや内臓疾患に悩んでいるが、一般の医者は、どういう治療をすればいいのか、いまだにわからず、町の医者に行つても、簡単に診療するか、薬を出すだけです。ヒ票による中毒症状をきち

つととらえる真剣な医学を求めます。益田（大阪・森永と素ミルク被害者連絡会議）僕らの主張は、森永の全製品不買運動を完徹してもらいたいということ、萩原裁判の支援を訴えるために参加しました。「光協会」ができて、一応被害者の救済制度ができ、聞

うことが困難にさせられたが、後遺症は残つてゐるし、「障害者」として生活苦がある。根源的なものは何なのか、「障害者」解放の立場でやり抜きたいと思つてゐます。公害闘争が、10年前さまでまに闘われたが、公害輸出によつて、国内的な矛盾が一応解消されたかに見え、運動がやりにくいのが、僕たちは、強い原則をもつて、「障害者」解放の視点を

もつて闘ひ抜きたいと思ひます。優生保護法の昨日の討論に対する感想は、「産む・産まない自由」が、国家の統制に對す

る一個人、一女性の自由というのとはわかるが個人主義的にとらえるのはどうでしょうか。

「産む産まない」は社会的な活動であるのだし、そこに立たなければならぬものではないでしょうか。「障害者」の生命は尊いものだし、生長の家の「生命の尊重」と正當に闘えなくなるのではないのでしょうか。改悪攻撃の本質がどこにあるのか、学習していきたいと思ひます。

不明（東京） 福祉研というサークルを通じて介助に入つてゐます。サークル活動の中で、『母よ殺すな』という文献を使つて学習会をする中で、滅私奉公的な介護の姿勢を変えさせられてきました。「障害者」と一緒に運動していくためには、いろいろなことを勉強しなければ、と思ひました。優生保護法のこと、女性の立場と「障害者」の立場を聞いて、優生思想そのものが悪いという立場に還らなければ、運動は拡がらない、と思ひます。運動を着実なものとするために、確とした一致点を確認したいのですが。

宮崎（神奈川） 優生保護法は、生そのものにがかる問題なので、きれいごとではなく、つきつめて考え、いったい何が問題で、どこをつめなければならぬのか、表面をなでる

のでなく、本音を言う中で考えていく必要があると思います。
不明(松江「障害者」の生活と権利を守る会)
優生保護法のきのうの議論はかなりすれ違いがあったと思います。「健康者」女性と「障害者」の思いを口に出しても、イメージ化され実態が伴わないので、生活の場を通じての交流をしなければかみ合わないなあ、と思いました。けれど、実際には政治日程に上っているので、先程から言われているように、統一見解というか、決議を上げてほしいと思います。みんなが言い放しとなっているので、司会はそのことを明確にすべきではないでしようか。

萩原(群馬・産婦人科勤務) 個人参加です。優生保護法そのものの撤廃の必要を感じている反面、人工中絶患者の看護をやっている者としてギャップを感じています。職業柄、もし一部改正されたら、ヤミ中絶という最悪の事態も考えられることが職場で言われています。そのようなことを考えたりで、優生法の撤廃を真剣に考えていきたいと思っています。

林(大阪・教員) 昨日も発言しました。きのう、病院のひとについて知っているのか、

との質問があったので、私の経歴を話します。私は5年前にのどを手術し、甲狀腺腫瘍をとり、声帯を動かす神経を半分切ったので、右側の声帯だけでしゃべっています。5か月間休んで職場に復職するとき、「治ったら出てらっしゃい」と、とりわけ組合から言われ、いくら「治らない」と言っても聞き入れられず、いろいろな運動をしてやっと復職できました。管理職は、医者に電話をかけて問い合わせたりしましたが、医者は「マイクがあれば大丈夫」と言ってくれ、中学に復職しましたが、今の中学教育の状況の中でクタクタになり、今は普通学校の中の特設学級で教師をしています。

私の病気は10年間経過を見る必要があるため、こう言えば病名はおわかりでしょうが、今も奈良県立医大病院に通院しているが、大病院には、目が見え、耳が聞こえ、足が歩けなければ、一人ではとても行けません。耳の聞こえない人も行く耳鼻咽喉科でさえ、耳を澄まさないければ、自分が呼ばれたかどうかかわからない。手話通訳の必要を私も感じるが、実態はそれどころではないのです。「元氣だから病院に行ってくるねん」と友人に言っているくらいです。

優生保護法についての、きのうのすれ違いについてはこう思います。私たちは、反戦、在日朝鮮人、部落差別の問題等にも執拗に女の問題を入れていきます。世の中の半分は女なのです。健康な女が趣味でやっているのではないのです。けれど、女の問題はきわめて個人的な問題として取り上げられがちです。「自分と彼女の問題」ではない、社会的、制度の問題なのだということを認識していなかったら、反戦など大きな問題の前で、女はいつも黙っていなければならなくなってしまう。女性差別を個人的な生き方の問題として言っているのではないことをわかってほしいと思います。

藤野(京都) 昨日は別の分科会に出たので、かつて△青い芝の会△が反対運動をしていた当時とどう違うのか、昨日の議論がみ合わなかったところ等、論点を司会でまとめてほしいのですが。

司会 自己紹介をやっていきますので、後でまとめていきたいと思います。

沼田(京都・手話で) この分科会に参加した理由は、聴覚障害者であり、女であるということからです。女性解放運動を少しずつやりがけていますので、優生保護法問題から、

それとちえていきたいと思っています。高槻（三多摩在宅「障害者」の保障を考える会） 僕たちは、多摩市の島田療育園という児童養護施設で、児者に対する薬づけ医療と発達論の裏付けによる苛酷な訓練に対して反対運動をしているのですが、1月9日から3日間、デモを張ってすわり込みをしました。優生保護法については、我々の仲間も一緒にやっているが、「障害者」と女性のさまざまな違いを、討論する中でより越えて連帯し、秋からの政府の攻撃を粉碎していきたいと思っています。

しらべ（三多摩優生保護法改悪に反対する私たちの会） 先ほど、「産む産まない」は社会的な問題で、個人的な反撃ではだめだという発言があったが、「産めない状況」つまり社会制度の問題が大きくあって、女はそこに目が行くから「産む産まないは女の権利」と言うことになるのだと思います。「障害者」の立場、女性の立場のすれ違いが現時点ではあっても、本当は手をつなぐ立場にあるのだと思います。国立の会で優生保護法の歴史を勉強したが、戦前「産め」と言った人と戦後「望ろせ」「障害者」は産むな」と言った人は同じだとわかった。女や「障害者」の生

き方を規制している人に対して、徹底的の問いを作りたいと思います。「障害者」の問題を本当にわかっているためには、具体的にかかわっていくしかないと思います。榎本（国分寺） 精神医療のこと、地域医療のことに関して知識が全くないので勉強してきました。

松島（新宿） 区役所の組合員で、自治体の職員として選択をせまられることが多いので勉強してきました。

渡辺（新宿区役所） 保健所の職員として、優生保護法の問題にしても、今年の秋に強行されようとしている精神衛生実態調査にしても、行政の末端の役割を担うわけですが、現場にいると仕事をすすめるうちに鈍感になって、自分が気づかないうちに「障害者」を権力に売り渡す立場にいるので、皆さんの話を伺いながら自分の仕事を考えなおしたいと思っています。また、△おひさまの会△という会で、「どの子も地域の学校へ」の運動をやっています。

さぬき（広島） 離人神経症という名の精神「障害者」です。この病気は人間が石のように無反応な状態になる恐ろしい病気で、自分の考えを持ち得なくなることが悲しく、私が

最も望んでいることは「治りたい」ということです。対人関係がなくなるので、交流を求めてやって来ました。よろしく。

不明（法政大学一年生） 先ほど、個人主義的な立場では反撃できないという意見があったが、私は個人主義を大切にしたいと思っています。今の高校生は権利が抑圧されていても、それを感じられなくなっているが、自分が抑圧された時、はつきりと痛みと感じられるならば、他人の痛みも痛みと感じられる人間になれるでしょう。これからも優保法にかかわっていききたいと思っています。

高野（横浜） 少し前まで松山に住んで介護に入っていました。優生保護法に興味があったて参加しました。よく、女性解放をやっている人が、「障害者」の生活に全然かわらない所でしゃべっていて、その中に差別性を感じたり、男性「障害者」が平気で女性差別をしていて、それを仕方のないことと認めて、自己批判の前に自分が「障害者」である所で肯定してしまっていることもあったりして、討論を聞いていても、言葉だけが浮いているような感じを持ちます。優生保護法を「障害者」と共に生きる立場で考えていきたいと思っています。

中山（富山・精神病者集團） 基本要求要綱

については、ここ2、3年話し合われていますが、精神医療のこと、医療被害のことをしゃべれるのは、全障連大会しかありません。我々の仲間は、入院している者が多くいますが、その実態を多くの人に知っていただきたい。自分は20歳で入院したのだが、気軽に入院することを、精神科の医者たちがキャンペーンを張っていたので乗せられたのです。それは、社会的な烙印となりました。警察、保健所のリストにも載るし、地域に戻っても監視の対象になり、労働したいと思っても就労できません。地域的なこともあるかもしれませんが、「各地の精神病院の差別的実態を調査、公表」と、要綱にあるが、本当にこういうことを実践できるような運動を展開していただきたい。また実態をどういうふうにつかむのか、患者や保安処分反対百人委員会の方々と協力して調査していただきたい。

富山では、差別問題も起きて、「全障連」の3回の確認会と糾弾会が行なわれているが、地域的な特性もあるのかもしれないが、精神病者が地域以外の出身者、片親者の人々の場合、病気の判断にもべつ視、偏見があり、長期入院させたりしている。強制入院は精神

衛生法29条にあるのですが、措置入院を強化したもので、人権侵害であり、何十年も隔離されることもある。当人の弁明の余地を与えてもらいたい。今後は、私はどのようにされるかわからないのです。理解していただきたいと思っています。（……以上、聞きとれた部分のみ）

斉藤（あごら） 女の雑誌を作っています。

私にとって女の問題は、即、差別の問題です。女の問題は「障害者」の問題であり、老人、部落、朝鮮、沖縄の問題で、それを分けて考えることはできません。昨日は本場に打ちのめされて、涙が出て仕方がなかったのですが、それは、私の魂の奥深い所で揺り動かされたからだと思います。親に殺された人のなまなましい声を聞いたのは初めてでショックでした。同時に私たちの声がどう言っても届かなかったのは聞く側に余りに深い悲しみや怒りがあって人の声を入れる余地がないのではなからうかと考え、胸がつまりました。

母親が殺そうとしたその時、父親は何をしていたのか。私の友達で医者と結婚した人が脳性マヒの子どもを産んだために離婚させられました。彼女は戦争で両親を失っていたので、その子どもを施設に預けて働いてたが、

資金は男の半分で、なかなか子どもを引きとれず、13年目にやっと引きとりました。彼女はそれを嘆き続けていたけれど、もし、その子と一緒に暮らしていたら、あるいは、その子を殺しかけたかもしれない、と昨日ふと思いました。脳性小児マヒが遺伝でないことはわかっているにもかかわらず、その子ができたことは母方の悪い遺伝だとされ、彼女は、夫から捨てられた女、悪い血統の女として世間から石を投げ続けられました。子の父親は出世街道をひた走り、現在ある大病院の院長となつてゐる。そのようなことが許される医療の現場は、当然、「障害者」差別を許すでしょう。私たちはこのようなことに怒りを覚えるから女の問題をやっているのだと申し上げたい。母が子どもを殺そうとした時、その母も殺されかけていたと思う。母に手を下されかけた人の、怒りや憎しみは消えないと思うが、お母さんに「あなたは、なぜ私を殺そうとしたのか」と聞いてほしい。その時、お母さんはいろんなことを話すでしょう。そしてその時、女と「障害者」の共闘の第一歩ができると思います。

山本（仙台） 「障害者」の介護に入っています。仙台では、介護闘争とか、刑法改悪

阻止等には若干の取り組みがありますが、医療や優生法の取り組みはありません。

昨日は、「障害者」と女性のすれ違いに面していました。討論の感じでは、「障害者」は産む自由を得ようとし、女は産まない自由を得ようとして、優生保護法改悪に反対している。本来、産みたい自由と産まない自由は外見的には違うが、広い地点で見れば、自由を奪い返すという意味で同じ闘いだと思います。ただ、女性の場合、「産む・産まない」の次に、その子が「障害児」か、そうでないかが問題になってくるし、優生思想との対決を迫られ、そこがゴツチャになって「障害者」は感情的になっているし、女性のほうには、自分の優生思想に対する姿勢をとらえ返し切れていないという印象を持った。もっと歩み寄れば共闘できるはずなので、みんな個人的に考えてほしいと思います。「障害者」が健常者にわかってもらうほうが難しいのだから、女たちが歩み寄るべきでしょう。迎合でなく、相手の心身に感動するだけでなく、自分の倫理観や社会の通念にまで引き降ろしてとらえ返さないと結局すれ違うでしょう。生命は確かに大事で、殺されないうに越すことではないが、生命の尊厳は一つの倫理で、これ

からどんなふう変わってくると思います。

東（富山） 学生で、介護をやっています。昨日、女性解放をやっていらっしゃる方の意見で、「障害者」の女が産みたい時に産むなといわれることと、「健常者」の女が産みたい時に産めといわれることは、自分の生き方を自分で決める自由を奪われる所で同じなのだ、と言われたけど、私は違うと思います。それは、「健常者」の女が産みたくないくという時に、はらんだ子どもが「障害者」であるという場合もあり、健常者はずっと「障害者」を殺す側にいたし、今も殺す側にいることを問い返すことなく同じだということは間違いだと思います。

医療のことに限しては、司会の川上さんが出産する時に介護をしました。看護婦が彼女を子ども扱いして、おかしいと思いました。出産後、フェニールケトン症の尿検査を川上さんは拒否しましたが、その時「あんただったらどうする」と聞かれ「もちろん受ける」と思ったが、それは、私が頭の中だけで「障害児」殺しはいけない、とわかってたつもりになっていて、三か月検診とか羊水チェックとか（を見聞しても）、「生まれたら仕方ないけど、できれば生まれないほうがいい」と思

っていたのが間違いだ、と彼女といろいろ討論する中でわかってきたんです。頭の中だけで議論するのでなく、肌でふれあうことが大切だと思います。

石塚（82優生保護法改悪阻止連絡会） ずっと脳性マヒの人の介護をしていましたので全障連大会には何度か来ています。そういうことから、昨年11・3山手教会の集会で、鈴木とし子さんに発言を依頼しました。女と「障害者」がどういう共通の基盤をもって闘うべきか考えてきています。今回の法改悪を、「障害者」は法そのものが「障害者」をまっ殺すのだから、どんな形でやってきても「撤廃」でなければだめだ、と主張するのは当然だと思います。が、今回の改悪は、去年までの「経済的理由」の削除だけではなく、いま新しい段階に入ってきています。阻止連でつかんだ情報によると中絶許可条件が整備されていく形になり、中絶してもいい女たちの整理、つまりこの女はいい、この女は悪いという、いろいろな条件を国が決めてくるという改悪案が検討されていて、12月国会に母子保健法の改悪とともに出されてくるだろうと言われています。今回の改悪を、私は「女は家制度の中で、国家のために子どもを産むべきだ。そし

てその子は健常児でなければならぬ」というイデオロギーの強制だどとらえています。だから、優生保護法の撤廃というところでは、女と「障害者」は一緒に聞えると思います。

今回の改悪について「基調」を見ますと、「本来の優生保護法の目的を純化させようとしている」ととらえています。それは正しいと思います。女として考えれば、「女は、家制度・結婚制度の中で国家のために子どもを産むべきだ」という思想の純化でもあるのです。この2つの思想の純化に対して、改悪反対の闘いを、そして撤廃の共通の闘いを作れると思います。が、「中絶許可条件の整備」という形での改悪に対してどういうふうな情勢をどらせるのか、その背景は、意図するものか、ということとを討論しなければだめだと思います。

平井（足立三里塚闘争に連帯する会） 優生保護法の改悪について、「生命の尊重」ということが前面に出されているが、優生保護法自体が、優生思想に貫かれていて、生命尊重を基にはしていないのです。その中で、自分の持つ優生思想について考えて、改悪阻止、優生法、堕胎罪撤廃の問題をやっていかねければならないと思っています。

村上（82優生保護法改悪阻止連絡会） いろいろと話し合われてきましたが、女は女としての立場をきっちりと持っていなければ、かえって切り崩されてしまうと、思いました。先ほど、「女性解放運動をやっていらっしゃる方」という言葉が、「（障害者）の女性の中から出てきました。が、私はその人の解放運動が自分に根づいた所に、男であれ女であれ、あれ、きちんと立つた上で行われなかったら、かえって大変なことになると、この頃強く思っています。

「殺されてたまるか」というスローガンについて、最初「さすが全障連だ」などと思っただけですが、私もある施設で50歳過ぎの戦争当時のある人が、今の状況の中で「本当に殺されるんじゃないかと思う」というなまの危機感を強く持っているのに接し、このスローガンの現実性を本当に自分のものとして聞いている人にしか、見えてこないということがあると思います。それに対して「健常者」は「殺してたまるか」ということでなく、「共に生きる」ことをどう進めるか、という形で返していくことだと思ふし、「産む産まないは女が決める」ということに対しては「そうだ女

が決めればいいんだ」ということでなく、「どんな場合にでも誰でも産みたい時に産める社会的な条件を共に作っていかう」という形で拡がっていかうと思うのですが、当事者自身の考えが、あいまになり、理念や言葉で一致しようと急ぐことが、自民党の家庭政策充実政策や優生保護法検討小委員会を出されていう言葉、「見私たちが喜んでしまいうような美辞麗句の中にまるめ込まれてしまうことになる。言葉の修辭的力というのは、政府のほうがより巧妙に持っているわけで、私たちの側は、小さな地域のつながりの中でどう具体的に人間と人間がつながってゆくかというところを、論争や対立もふくめて続けていくことだと思ひます。

胎児の問題のところになぜ「障害者」の意識が集中してしまうのか。女の場合は、胎児がどうだという前にいろんな意味での生き方の選択がある。いま現実に「障害者」が性の領域から排除されてしまう構造があり、それは「健常者」がつくったものだと思う。そこをあいまいな形で美辞麗句のところで妥協してしまえば、逆に性という人間関係がもつ問題が見えなくなるでしょう。

平野（福岡・学生） 全障連の大会参加は初

めてで、介護も初めてです。何もわからないけど、少しずつ勉強していきたい。将来看護婦になりたいが、この会で「障害者」に対する皆さんの医療体制を知って、自分は絶対にそんなことはすまいと思った。

志岐（山口県連絡会） 教育労働者として79義務化（闘争）のあたりから、選別・隔離・収容に対し運動する中で、障害者解放とは何かを模索し、内なる優生思想をとら返すことが大切だと思ふようになりました。

と同時に、女としては3年前流産で死にかけ、家制度の中で母性保護おかまいなしの労働強化で体をこわしたとき、何のために私は生きているのか、女が自分の置かれているところで訴えること、抜きには私は生きていけないと痛感し、女性解放の大切さを感じるようになり、「障害者」が解放されることで女が解放され、女の解放で労働者が解放されることが見えてきました。山口県連絡会は、「内なる優生思想を撃つ」ことから始まったもので、いろんな運動をやっている人がいます。きのう「女解の人は」という言い方をされたが、もし責められるとしたら、女がこの10年間「優保法撤廃」を言い続けてきたかだと思ふ。「障害者」はそれを言い続けてきたのに、

どれだけ共有してきたか……。同時に、男たちもそこを担ってきたのかどうなのか……。

秋に向けての闘いを組むと同時に優生思想と息長く闘い続けなくてはと思います。

氏名聞きとれず（関東精神病者有志の会）

世の中に絶望していま入院中です。全く世捨て人のように生きていこうと思ったが、少し元氣を出さないと精神病者も浮かばれないなと思って参加しました。

精神病者の中にも女性差別があります。本人の同意なしで保護義務者の同意で墮ろすことができる。産む自由がない。「産む産まぬは女の自由」どころか、子ができると墮ろせと言われる。健康者の女が墮ろすということとはちがう。私たちは谷底に生きている。突破口がない。ある病院では、看護士が病者の女に「男のモムをくわえたら出してやる」と言った。病者の女は性においても虐待されている。

森川（山口県連絡会） 優生保護法は撤廃しなければなりません。そのために、女性解放を闘う者が「障害者」と共同できる関係をつくらないといけないと思います。今すぐには難しいかもしれませんが、この会で出会ったことを後戻りさせてはいけません。私たちは障

害者差別の上にあぐらをかいていた。と自己批判しています。

川（下関） 初めて参加しました。韓国人です。皆さんのお話を聞いて、私は自分を弱く思いました。もっと強くなりたい。韓国人の差別がだくさんある。それをやりたい。杉田（愛知） 優保法のごことで発展的な討論ができるよう願っています。

泉（82阻止連） 先ほど「障害者」の女と健康者の女のレベルがちがうという話が出たがあえて言いたい。「障害者」の女は産まないことを選ばされ、「健康者」は産むことを強制されており、裏腹だと思う。言いたいことはいろいろあるが、討論でなく聞きっ放じになっているのが残念。「本音で言い合えば」と何人かの人が言ったが、本音って何だろう、と思った。

清水（広島） 障害者の場合、子どもが出来た場合、産みたくないくことは産んでもあど育てていく自信がないということです。（聞きとれず）

氏名聞きとれず（広島） 介護にかかわって3年です。自立障害者の話や施設にいる人の話を聞いて、障害者にとって医療は死活にかかわる問題だと痛感しています。次々と病氣

にかかり、病院を転々としている人もいる。生活保護を受けている場合、同じ内科の病気であれば2つの病院で内科の診療は受けられないし、自分のからだのこと、薬のことが伝わらぬもどかしさがある。衝撃的だったのは、施設から出て来た障害者が「自分は一度死んだ人間だ」とよく言うこと。目の前の仲間が病気になるって、医者に診てもらいたいと言っても診療を受けられず病気が悪化していく。頼むから」と取りすがっても殺じていく。そのとき看護婦が言ったのは、「バイー丁あがりー」。(そのあげく)それを見ていた障害者に、「これを外で言ったらどういう目に合うかわかるとるね」と言う。施設の外に出て初めて告発ができる。医療を受けるまでが大変なうえ、受けても人間扱いされない。40いくつのおばさんを子ども扱いしたり、本人に(病状や治療法を)言わずに介護の人に言うなどは日常のことです。

いま女解に問われているのは、自分たちがどこまで障害者の利害を担っていくのかということ。阻止連の中でも、障害者と共に闘っていくのか、女の問題のところで闘うのか、分岐が始まっていると聞いている(そんなことないよ、ちがうよ、の声)。ここに来ている

人たちは障害者の声を聴こうとしている人たちなんだから、実際に障害者の生活に踏み込み、どろどろした人間関係の中から自分たちの力を再編する闘いが重要と思う。そこからやっていきたい。

氏名聞きとれず(東京・池袋) さつきCPは遺伝しないのに離婚させられたという話が出たけど、遺伝しないのにという言い方はおかしい。遺伝してもいいと思う。

私は子どもを産んだけど、病院で墮ろせと言われた。自分のこともできないのに、なぜこういう結果になったのかと。「障害者」はSEXしてはいけないというのです。妊娠中10か月間病院に行くたびに、いつ墮ろされるかと怖かった。「障害者」は根本的に出会いから排除されている。女解の人たちは介護から入ってきでほしい。「健常者」と「障害者」はちがう。お互いの違いを見つめていきたい。斉藤(82阻止連) 昨夜みんなと感想を話し合ったが、私は昨日の発言に打撃を受けた。ひと口に優生保護法改悪撤廃、堕胎罪撤廃なんて簡単に言えることじゃない。女が生きたために産む産まないは自分で決めるってことも簡単に言えることではないと痛感しています。

「健常者」の女が産婦人科に行ったとき女として受ける屈辱も同じで、多くの女が経験している。まして中絶なんというところ、「一丁あがり」といった感じでその場で帰され、母性保護なんてない。母子保健法の改悪構造の中には、「おなかの子どもに異常がありますよ」とか「風疹にかかりましたね」と言われ、「それでですか、墮ろしてください」と言ってきたことがあると思う。私たちが「五体満足な子が生まれたら幸せ」とか、「就学時健診でダメだったらどうしよう」とか、しらすしらすのうちに日常的にやってきたことが、「障害者」が抹殺されてきたという言葉に置き換えられると思う。言葉では何とでもきれいなことが言える。「障害者」解放と女性解放は裏腹なこと。一面だけを知るのには残念です。機会があれば個人的にでも「障害者」の集いに参加したい。この会に参加してよかったと思っています。

佐々木(広島) 優保のことで一言。男性は女性に押しつけないで協力してほしい。それだけです。

司会 ありがとうございます。予定の時間を超え、討論を深める時間がなくなったことをおわびします。

鉄連の仕事差別裁判

6月24日第28回公判で佐々木元子さん初登場。採用の経緯から、元子さんの組合活動と鉄連側の対応について証言。鉄連が司書を募集していたことを明らかにする飯田橋職安からの回答文や組合で交渉した際の連盟側の発言内容を記録した「元子メモ」などを提出、着実に立証した。

8月30日の第29回公判では、77年8月29日配転を言い渡されてから9月1日発令まで、常務室と呼ばれ、「机がなくなる」とおどかされるなど、なまなましい経緯を記したさらに決定的な「元子メモ」が提出され、衝撃を与えた。最後に、「何かつけ加えることは」と弁護士にうながされた元子さんは、女の状態をみると訴え、裁判に訴えなければならぬことと自身が差別的でくやしいと思わず落涙。閉廷後、支援の女性たちも、口々に「自分も同じ状況」と訴え、涙を流す人も少なくなかった。

鉄連裁判は、たんに7人の原告の問題では

いよいよヤマ場！

なく、全女性の仕事差別を告発したものの。この勝敗はこれからの女性の地位に大きくかわる。次回は10月25日（火）10時～12時、東京地裁民事19部で、被告側からの反対訴問が行なわれる。相当意地悪な訴問が予想されるので、ぜひ多数傍聴し、支援してください。（28回は原告側40人诉被告側30人、29回は40対25くらい。鉄連側も管理職を総動員し、シブティです）

企業は社会保障の

男女差別撤廃を

ECが各国に指令

EC（欧州共同体）委員会は、加盟10か国に「民間企業が従業員に実施している社会保障や退職年金、家族手当などにみられる男女差別を今後3年間に改めること」というガイドラインを通達、これに合わない法律や労使間の契約などを改正するよう求めた。欧州に

進出している日本企業の現地従業員にも当然適用されることになるので、結果的に日本国内にも影響することも考えられる。

大手企業の3分の2は

大卒女子採用ゼロ

高卒に代えて短大卒採用へ

上場企業の大卒男子採用は今春比11・3%増といわれる就職戦線。しかし相変わらず女子にはきびしい。8月26日発表された大手160社の採用予定では、女子の大卒採用は64社。女子を採用するところでも、ほとんどが前年より減っている。前年に比べて例外的に増加しているのは、左記14社のみ。

◆ミサワホーム 大卒事務系14↓15、技術系2↓5、短大5↓8（ただし高3↓2）

◆松下電器 高850↓1150（大卒0↓0、技1000↓1000、短3000↓3000）

◆ソニー 大・事23、技12、短大166↓200、高40↓70

◆日本ビクター 大・事15↓25、高660↓750（大・技5↓5、短30↓30）

◆富士ゼロックスⅡ大事50↓60(短・高0↓0)

◆三越Ⅱ大49↓50、短217↓220、高421↓430

◆松坂屋Ⅱ大事100↓250、短110↓140、高480↓500

◆ジャスコⅡ大事49↓125、技16↓25、短3↓4、351(高365↓380)

◆西友Ⅱ大事58↓90、技5↓10、短29↓120(高634↓520)

◆ユニⅡ大64↓100、短63↓100、高339↓350

◆伊藤忠Ⅱ短80↓120(大・高0↓0)

◆住友商事Ⅱ短125↓130(大130↓130、高0↓0)

◆野村証券Ⅱ短277Ⅲ300、高49↓100(大0↓0)

◆サンリオⅡ大事47↓50、技3↓5、短23↓25(高10↓10)

子育て後の

働く主婦6割時代に

しかし大部分はパート

女性、とくに既婚者の就業率は年々伸びて

いるが、7月10日の総理府発表では、就業構造基本調査(全国35万世帯の15歳以上の世帯員約90万人対象、昨年10月1日実施)によると、就業者数は男3508万3000人、女2280万5000人で、男女を通算した就業率は1.4%増(79年比)。

主婦の就業者は約1531万人で4.2%増、3年間で167万人増え、50.8%と過半数を超えた。とくに35〜54歳は61.8%の高率。夫の年収400万以下の過半数は働いている。

女子雇用者は約1500万、その59%は主婦。主婦のうち正規雇用は60%で35%がパート。未婚女性は正規が87%でパートは10%、離死別者は68%が正規でパートは23%なのに對し、主婦のパート率の高さが目立つ。

国籍法改正作業大詰め

次期国会上程へ向け

国籍法改正に関し、法務省民事局は2月に中間試案を公表したが、これに對し寄せられた日弁連、48団体、婦人法律家協会などの反論その他を勘案し、9月から法制審議会国籍法部会で改正要綱案作成に入る。法務省とし

ては、できれば年内に国会に上程したい意向のようである。(国籍法改正についての解説は28号「窓」(354ページ)参照)

優生保護法の

全般的見直しを

自民党優生保護法委中間報告

4月13日に発足した自民党政務調査会社会部会の優保小委員会(改正派5、慎重派5、中立4)は、5月18日までに5回の会合を重ね、左のとおり中間報告を発表した。

一、本委員会は、優生保護法の立法経緯とその後の改正の推移について精査した後、委員間の意見交換、改正推進の立場と慎重な立場双方の関係者からの意見聴取を行ない、さらに関係する諸政策についての説明を受けるなど、優生保護法の改正問題について幅広い視野から鋭意真摯な検討を進めてきた。

(1)まず現行優生保護法は、終戦直後の特殊な社会経済情勢と国民意識を背景として制定されたものであることから、法の立法趣旨の根底に、人口政策や民族の逆淘汰の防止といった思想が存在することが判明した。したがってこの点、今日の社会思潮と医学

水準等に照らして法の基本面に問題があるものとの認識を得るようになった。即ち本法の目的規定の中の「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」との表現や、第三条第一項に掲げる優生手術の適応事由及び別表に掲げる遺伝性疾患等がその具体例である。

(2) また、本法の人工妊娠中絶制度は刑法の墮胎罪の遺伝性阻却事由に該当するという面を有していることを考えれば、現在の優生保護法及びその運用は、かなりずさんであると思われる。

(3) 特に、人工妊娠中絶事由のうち、いわゆる「経済的理由」については、国民の生活水準の向上、社会保障の進展等の背景もあり、またその具体的な適用範囲についての明確な基準にもとばしこと等により、この要件が乱用され、極端に安易な妊娠中絶の実施、その件数の異常な増加を現出させ、ひいては生命軽視の風潮を招来している。

(4) 以上の理由等により、現行優生保護法は、これをそのまま維持し、何らの改正や検討を必要としないということについては少なくともかなりの問題があるものと思われるという大方の認識がある。

二、しかしながら、反面これらの問題点解消のための改正の具体的な方向、手順等については、慎重な配慮と深い考察が必要であるというのも大方の委員の認識である。

(1) 性急に現行法中第十四条の「経済的理由」のみを削除するという最小限の手直しについては、その結果、ヤミ中絶、子捨て、子殺しの頻発等の弊害が生じるとする意見も強かった。

(2) あるべき改正の方向は、優生保護法全体を、今日の社会にふさわしく、かつ実効性のあつるものにしていくことである。そのためには「経済的理由」の要件のみならず、人工妊娠中絶が認められる具体的なケースを現在の医学水準と社会通念に適合させるべくより厳密に検討していくことが必要である。またこれと関連して、妊娠した婦人が安心して子供を産み育てることのできる環境を促進する母子保健対策を初めとする諸施策の充実、「望まない妊娠」そのものを防止する対策の推進、有効かつ妥当な避妊方法の指導普及、正しい性知識の周知のための性教育の適切な実施、働く有子の婦人に対する対策の充実等について、整合性のとれた総合的な対策を確立することも重要

な課題である。

三、本委員会は、大方の合意が得られた以上の諸点について、今後とも英知を結集し、幅広い検討を進めて最善の結論を得べく努力してゆく所存である。

なお、最後に、本委員会の役割について、巷間「経済的理由」の要件の是非のみを検討しておるものと認識されておることは、関係者の意見陳述の際にも明らかになされ、またかかる認識の生じた一連の経緯についても無理からぬところがあるとも考えられる。しかし現実には本委員会は広範多岐にわたる課題について冷静かつ真剣な検討を進めているところであるので、このことについて、関係団体のみならず広く国民全般への周知を図り、社会一般がこのことについての認識と理解のもとに適切な世論形成と当委員会に対する助言を期待すること切なるものがあることを付言しておきたい。

(注) 参院選直前にあわただしく発表されたこの中間報告には、「経済的理由の削除」が投票に与える影響を苦慮したあとにはじみ出ているが、優生思想そのものの見直しには全く言及されておらず、「改正」「整合性」の名

のもとに、さらに巧妙な「強化」が行なわれる危険性を感じさせられる。優生保護法そのものの全面撤廃に向けて、さまざまな形で与論を喚起する必要を痛感する。

なお、自民党内での「改正」中心勢力となっていた人生長の家Vは、最も強力な「改正派」として活躍する予定だった寺内弘子氏の落選（比例代表区21位に指名されたため）をめぐり、自民党に対する不満が噴出、生政連は解散したため、今後の展開は微妙なものとなる、と観測されている。

いずれにしても、衆議院選挙がカギ。これで「改正」派が多数を占めれば、参院選で「改正」勢力が圧勝しているだけに、見とおしは非常に暗いものとなる。

生命・倫理想

体外受精等を検討中

林厚相が私的懇談会として4月に発足させた「生命と倫理に関する懇談会V」（中根千枝、加藤一郎氏ら）は、体外受精、遺伝子操作、脳死、尊厳死、人口問題などを討議中。話し合いの結果は公表されることになっている。

男女平等法大詰めに

10月22日大集会

「国連婦人の10年」もあと2年、平等法と労基法をめぐる情勢はいよいよ急。女性解放各グループは「女性差別撤廃条約完全批准、真に役立つ男女雇用平等法をつくらせよう10・22集会」を開き、総力を結集する。また9月17日には学習会が総評会館で開かれる。

年金問題と優生保護法

48団体秋の取組み

自民党婦人部から共産党婦人部まで「女」の問題で共同を続けている48団体は、年金問題、国籍法、平等法、優生保護法などをとくに重点課題として学習会等を行ない、性差別撤廃条約批准に向けてスクラムを組む。特に9、10月は、年金と優保に焦点があてられる。

反核反戦の秋、各婦人団体も熱意

トモホークの東アジア配備、レーガン訪日など、いよいよキナ臭くなるアジア。秋から

来春にかけて、反戦反核運動はヤマ場を迎えそう。各婦人団体は10月17-23日の国連軍縮週間を中心に、また日市連など反核運動グループはレーガン訪日に焦点をあてて、反戦の声をさらに大きくあげる予定。

女性救援センター開く

性犯罪の被害者救済を……とL.F.のメンバーを中心に準備をすすめていた救援センターが9月1日オープン。医師・カウンセラー・法律家等も協力する。毎週月水金、夜7時-10時オープン。連絡先〒136江東区城東郵便局私書箱7号。電話03-2207-3692

スイスも旧姓OKに

法律上では先進国中、女性の地位が最も遅れているスイスでも、憲法の条文から、夫の地位を「家族の長」とした1項を削ることを6月13日、下院で可決、既婚女性の法的地位向上を定めた法案も139対7で可決した。この法案では、結婚後女性が旧姓を名乗る権利、夫と妻が財産を均等に所有する権利などが認められている。

国際色ゆたかに

8・14反戦マラソン演説会

こととして3回目、もはや「名物」として定着しそうな、渋谷駅ハチ公前広場での反戦マラソンは、折しも台風模様の悪天候の中で10時から6時まで行なわれた。

紀平梯子さんたちのアビールに続いて、ペラウから来たキヨコ・チゲラクさんは「放射性廃棄物をミクロネシアの海に捨てないで。安全なら東京湾に捨てられるはず」と切々と訴え、英国グリーナム・コモンの平和キャンプで座り込み中のレベッカ・ジョーンソンさんは「平和は非暴力的な方法でこそ実現する。女性差別を許す社会は戦争への道につながる」と、達者な日本語で語りかけた。

高木敏子、下重暁子、俊萌子、忍草母の会など、例年の顔ぶれも揃い、「毎年敗戦記念日に渋谷で集まりましょう」の声も。

前々日ハあごろVを訪れた米国人エディ・ス・デイヴソンさんや、IFJの平和分科会に参加したリンダ・クルーズさんたちも飛び

入りで壇上に。例年になく国際色ゆたかな集会になった。この勢いに恐れをなしたのか、恒例の「右翼」はついに姿を表わず、「右翼と対峙しよう」と張り切つて来た参加者たちをガッカリ(?)させた。(Y)

いまなぜ

朝鮮人虐殺か……

ことしの9月1日は関東大震災60周年。震災に乗じて行なわれた朝鮮人・社会主義者虐殺を掘り起こそう、という動きも活発になっている。

その1つ、「震災下の虐殺」(8月23日、江東区民センター)に参加してみた。朝鮮人虐殺のスライド、映画に続き、生き残り朝鮮人と現場を目撃した日本人からなまなましい証言が語られ、この問題をいま掘り起す重要性を改めて痛感した。当時の朝鮮人の識別は日本語の単語の発音で行なわれたが、東北な

まりのため朝鮮人と誤認された人、朝鮮人をかばったために捕えられた人もいたなど、群衆心理の恐ろしさを感じた。3・1独立運動を圧殺した後ろめたさから生まれた恐怖! 虐殺を示唆した内務省警保局長後藤文夫が、国民優生法を推進した後の内務大臣であることを思い浮かべながら、複雑な気持ちになった。各地でぜひ上映活動をしたいと思う。なお東京では、9月11日(日)、18日(日)、震災下における朝鮮人、大杉栄、伊藤野枝虐殺追悼集会が開かれる。(S)

低調だった反戦署名

7月16日、渋谷ハチ公前で、ハ核廃絶と軍縮を実現するために婦人の行動を広げる会V(通称36団体)で、反核署名活動。加盟団体の1つとしてハあごろVも参加したが、広場に集まる人々の無関心、非協力は想像以上に、とくに拒否的なのは若い女性たち。

「私の大学では、あらゆる署名活動は禁じられておりますので……(某名門女子大生)」
「あら、いま友達が署名してあげたでしょ。」
だから私までしなくてもいいじゃない。(思

わず、友人とあなたは別人格でしよう！と論争。我ながらオトナゲナイかな」……

いつも協力的な中年すぎの女性たちも、四方に気づけり。「あの……、この署名のために手紙が来ることはないでしょうね」

シベリアに抑留されていたという男性は、「オレは戦争は大きらい」と言いながら、「平和運動はカソ連の核はいい」なんていう。けしからん」と長い長いお説教。

意外に協力的だったのは、額をそり上げた中高生。「暴力はいかんよな」「バイクの暴走だっていかんしな」と言いつつ署名。外国人たちも、「核はもちろん反対」と、気軽に署名してくれた。それにしても、去年のあの熱気は、どこへ行ったのか——。(C)

原爆・水爆のない世界を！

15 かの国の女性が話し合い

8月3日、原水禁世界大会に参加した各国の女性代表と36団体の女性たちが、「核のない世界を目指して」女たちの内側の真実の声を伝えあった。

ペラウ、インド、北鮮、英、米、ギリシヤ等、世界の女性たちは、「唯一の被ばく国、日本の女性に期待する」と口々に連帯を訴え、

日本側は、原水禁運動の生みの親、安井田鶴子さんらが、「いのちの限りたたかう」と決意を表明した。それぞれに思いあふれる発言だっただけに、討論の時間がなかったのが惜しまれた。

なお、世界大会に英国代表として参加したレベッカ・ジョンソンさんが、大会の決議に「女性差別の撤廃」を入れるため、朝の5時まで頑張つて、ついに日本の男性起草委員たちを説き伏せたと、起草委員の1人、日本婦人会議の清水澄子さんが発表すると、大きな拍手がわき起こった。

国内外とも、どの発言も熱のこもったもので、多くの人に聞いてもらいたかった。録音テープ希望の方は事務局までお申し込みを。

盛況！

第3回女性学講座

8月26—28日の3日間、国立婦人教育会館で開かれた女性学講座は、ことしで3年目。「性別役割分業の固定化と流動化」が今年度のテーマだったが、2500人の定員に350人以上の応募という盛況。どの受講生も、みな目をキラキラ輝かせて、発表に聞き入った。

発表者は司会者を加え25名、それぞれの専門分野から学際的な研究を発表。A女性学Vの層が一段と厚くなったことが感じられた。

△あごろVでは、斎藤千代さんが実践活動の部で報告「Women's Studiesは、本来「婦人問題」の意味。学問であると同時に実践を重視したい。従来の学会のあり方や、学問体系そのものも、フェミニストの視点で洗い直すものであつてほしいと、最後に一言つけ加えた。

惜しまれたのは、盛りだくさんすぎて、それぞれの発表時間が短かったうえ、討論の時間がほとんどなかったこと。大学に講座を持つ人々の発表が多く、初参加の一般の主婦にはややとつきにくい面もあったこと。地域の婦人学級の講座との接点がほしいという声も聞かれた。

参加者の内わけは、40代67、50代53、30代48、20代44、60代23、高田ユリさんはじめ各団体での活動家や、大学の女性学講座関係者が多かったが、女の集会は初めてという一般の主婦も相当数みられた。地域別では、東京70、神奈川29、埼玉26、千葉17、大阪12、岩手11、茨城10、栃木・福岡各9、長崎・広島各6、新潟・静岡・岡山各5など

〈例会報告〉

学校は子どもを守るか

6月23日、名古屋市婦人会館で、初参加の3人を加えた10人で話し合った。

最初に長谷川友子さんから「学校は子どものいのちを守るか」について問題提起。

自宅で算数教室を開いている友子さんの所へはさまざまな子どもたちがやってくるが、その子どもたちに妙な感覚が芽ばえているのではないかと友子さんは思うことがある。たとえば、成績が香ばしくなく仲間はずれにされている子どもに分けへだてなく接している、「先生、本当にあの子好きなの？」本当は先生も好きじゃないんでしょ」と真顔で聞きにくる子がいる。いったんダメな子とレッテルを張られれば、とことんダメであらねばならないという〈仲間意識〉のこわさもある。

また、中学生の通学路にあたる自宅前には

時々学校をサボった中学生がたむろしている。話しかけてみると悪い子のように思えない彼らがたむろしている場所は四方から見通しのよい所。本当に悪事をするのなら、もっと人目につかない所にいるだろう。気にかけてもらいたいと思っているのではないかと友子さんは言う。

これを受けてみんなで話し合った。

初めて子どもが学校に上がって、画一主義形式主義に驚かされたという人。中学校の管理教育に子どもがくたびはてているのを見て、いのちすらおびやかされかねないと思っている人。公立保育園の中にそれを感じている人。PTAの問題、大学までは、という高学歴志向に問題があるのでは……など、多くの悲観的な声が上がった中で唯一の救いは、近所の八百屋さんが始めたという保育園のなし。土に親しむことをとても大切にし、自分で植物を育て、収穫し、のびのびした保育をしているという。話し合いとしてはまとまらなかつたが、「またやりたいね」と話し合った。次回は比良小の若林栄養士を招き「学校給食——いま何が問題か」を考える予定。

学校給食——いま何が問題か

比良小学校栄養士 若林宏子さんに聞く

△あこらVの年間テーマ「いのちを守る」にちなみ、7月も先月に引き続き「子どものいのち」をめぐり、若林さんのお話を聞いた。

＊

私は栄養士になって9年目。調理員さんとはとても一生懸命給食をつくっています。（名古屋市内では材料だけが届けられ、各校で調理。だから、子どもたちが残すと腹を立てます。なぜ残すのか考えない……。作る側でなく食べる側に立って考えないといけないんだけど、私も初めは作ることに一生懸命でした。短大では食品公害のことも教わらないし、その意識もないし……。

郡司算孝の学校給食の本を読んで、自分こんな恐ろしい仕事についていたのかと思いました。作るほうは自分の立場しか考えない。敗戦直後の救援物資の感覚がまだ残っている。数字で満たされた物を与えておけばいい

という考え方があつた。子どもの嗜好調査というのがある。20%以上の子どもがきらいなもののはポツになります。80%以上の子どもが好めばよいということ、その嗜好がなぜ成立ったかという調査はされません。加工食品に慣れて育つてゐるため、ワカメ、ヒジキ、大豆入りハンバーグを作つても、嗜好調査で20%以上が好まないというポツになります。

新しい材料の添加物は、栄養士にはわかりませんし、聞いても「入っていません」という答しか返つてきません。調理士も子ども千人に四人ですから、加工食品に頼らざるを得なくなつてきます。野菜も冷凍もののため、カロリーやビタミンも計算されたものとはちがってきます。ただし大腸菌にはとても神経質で、きうりでもキャベツでも必ず湯を通すことになつており、決してなまものは使いません。

先割れスプーン問題では、隣の比良西小ではハン持参、忘れた子どもは先割れスプーンを借りられるようになっており、何の問題もないようです。

栄養士の位置づけはあいまいで、昭和49年に教育委員会で2500人以上の生徒につき1人の栄養士を置くことになり、現状より減らされた地域もできました。栄養士は献立を

つくるわけでもなく調理をするわけでもありません(私は調理を手伝つていますが、人数が少なく、組合もあります)。

現在、家庭の食事が問題になっていますが、いま子どもたちの食事を作つてゐるのは給食世代ですから、学校給食が影響を与えてゐるのではないのでしょうか。

今後の問題として、栄養士の在籍期間を3年から10年くらいに延長すること、1校に1人は必ず置き、統一献立でなく学校ごとの献立にすることなどを提言したいと思つてゐます。思つてゐることを発言していくことで、同じ意見の人に会えるのではと思つてゐます。

〔お話を聞いて〕

◆子どもの担任の先生に、給食について質問してみました。二年の担任は「おいしい時もありません。量は私には少し足りない」。四年の担任は「おいしいですよ、昔に比べて」。

◆ビニールを破つて食べるめんの件について、井戸端会議では「えっ、自分で破つて食べるの!」という感じでしたが、懇談会で発言したら、しらけてしまつて何の反応も示さなかつた。かわりたくないという感じ。◆うどんの時は割りばしだが、全市内で使われる割りばしの量を想像すると、恐ろしい。

東南アジアのみどりが奪われているというし……。しかし一母親が思つても、どこへ言つていけばいいのかわからないので懇談会で話したところ、「伝えておきます」とだけ。

◆現在玄米菜食をやつてゐます。文化としての食事でなく今はエサ。おしきせの文化が食事に入つてきて危機感を抱いてゐます。

◆懇談会でどんなに発言しても、意識のある先生がいらっしゃらないと取り上げて頂けない。

◆東郷町では給食センターから「にこに弁当」が届けられます。子どもによつては幼稚園から中学校まで12年間、同じセンターからの給食を受けることになりました。

◆給食協会で食品を選ぶとき、タール色素と人工甘味料を含まないということが条件で、他の添加物は野放し。注文するのは給食協会、学校には選択権がない。苦情を言つても通りません。協会の理事には小中学校の給食指導等で名をあげた人がなつてゐます。

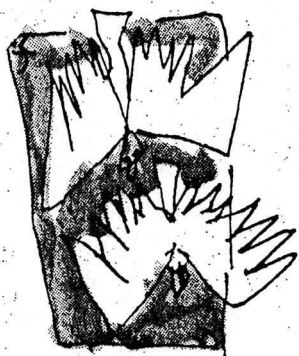
教員、校長、栄養士、調理員から成る給食研究会がありますが、校長、教員に押される、等々、母親の立場から、切実な声が出た。この声をどう行動に結びつけていくかが今後の課題と思う。

夜を明かしてホンネを

合宿を終えて

あの時から1か月近く経ちました。合宿の体験は、その後の皆さんの胸の内にどんな形で残っていますか。各自の生活の現場で、何かの力になり得たでしょうか。

夕食を食べながら話を始めて、またたくまに減っていく中華の皿を気にしつつ、食べて、飲んで、会話はあちこちに飛び交いつつ流れていきました。例会では時間を気にして言い切れなかった胸の中を吐き出して！との思いがかなり一致して参加したのではないかと思います。



話題の中心は、エングの世界を通しての世界観、結婚観に的がしぼられたような気がしました。精神の奥深いありようへの関心の高まりは、徐々に子育て期を脱し、自己実現への道を進み出しているメンバーに共通するものようです。(参加者14名、うち会員外5名)

疲れたけれど消耗せず

—子もりうたのこと—

平田ひとえ

夜を明かして語り合った言葉の渦に巻き込まれながら、一人一人の生の重たさを背負いきれずあえいでいました。貴重な問いかけを私なりに問い続けていくしかないようです。

△子もりうたのこと▽ まだもの言わない泣くばかりの幼子を抱きながら子もりうたをうたっていた。すると心が静まり、△この子と私△、△いま△、△この場△を超えた不思議な世界が視えてきた。その世界をどう表現したらよいかわからず、感受したのもろもろの心の動きを、ただ大切にしまってきた。少なくともそれは私にとって単に△経験の反復△と呼ぶだけのものではなかった。泣く子を寝かすただけにだけうたっていたわけではない。むしろ

私は私のためにうたっていると感じられた。私のいらだつ心を静めるために……。ここに母が在って、母の母が在って、そのまた母が在って……。こうやってうたい継ぐ母たちの姿が視え隠れしていた。

歴史とは何だろう。家族とは何だろう。あくこともなく生まれ、産む。どうみても生きやすくはないこの世に生命を産む女の心が愛しくてならなかった。私は初めて△歴史△を感じていた。歴史は、こうやって一人一人が生きて死にしながら積み重ねてきたもの。遠い過去のことではなく、今を生きる私の生に関わるものとして迫ってきた。

村井さんが「自分の中の子どもを寝かしつける」とおっしゃった。そうなんだ！「私の中の子ども」という表現は、私の大切な言葉のひとつになった。たしかに、子を産むことは私を産むことだった。子を育てることは私の中の子を育てることだった。私の内面に「子どもも ははも ちちも おともいいる」と感じるができる。子もりうたって、その時代を暮らしながらうたい継いだ女たちの心が伝わってくるような気がする。

甘いのでは？

「仕事に向かう男」批判

阿部 ひろ江

合宿で出た「男が仕事社会に順応していることに対する怒り」、私も結婚していた頃同じような気持ちを味わったから、気持ちとしてはよくわかるのだが、やはり甘いのではないか？という感をおさえない。

私も仕事をしている者の一人として、「仕事」に対してそう簡単に反逆できるものではない。この社会のとてつもなく大きく、そしてきびしい仕組みの中に組み込まれている者の一人として、「たった一人の反乱」なんてとんでもない。何人かで組んで仕事をしている時に、私のように女手一つで子どもを養っている者は、本当に数えきれないほど迷惑をかけている。「普通に働ける条件を」なんて、とてもじゃないが言い切れない。いつもみんなにひけめを感じつつやっているのです。

娘は交通事故のあとずっと具合が悪く、私も膝をいためていて、共同生活者やボランティアに助けられて生活しているが、精神的にも肉体的にも落ち込む一方。ドロップアウト

は簡単にはできない。反乱は一人ではできないことじゃない。長く地道な取り組み、問いかけが必要なのです。とにかく一人ではできないことはない、ということを言いたい。

男の本音を話せた！

谷口 原二郎

「あごろ京都の合宿に來ないか」と誘われたとき、ふと脳裏をかすめたのが、男の本音を自分なりにとことん話してみようってことだった。本音とは、案外本人ですら気がつかない場合が多いのではないだろうか。こういった類のものは、何かの問題で他者と直面しない限り、わざわざそんな面倒はしないものだ。

男が男自身でも気づかない男の部分。何げなく当たり前と思ひ込んでいる男の役割。フェミニズムの何たるかをそれなりに知識として持っている男でも、「男の解放」としての視点を持っているものが果たしてどのくらいいるだろうか。

男は強い戦士でなければならなかった。だがこれからは、他者や女に対して強い戦士であることでなく、自分自身に対して強い戦士とならなければならない。他者である女や子どもにどうして戦士でなければならぬのだろ

うか。ましてや同性である男に対してどうして戦士として立ち向かわねばならないか。少数の家族、ほんのひと握りの断絶された人間関係のために、どうしても多くの良き友を敵としなければならないのか。男として育てられた自らを唯一の敵として戦士となることを望む。女や子どもに心やさしいだけでなく、敵である自らの男性に心やさしくなれる日こそはじめて男は、心やさしい友とめぐり会える。

自己批判の目のない会話に多くの実りはない。入あごろ京都Vはどうだったか……。

十数人の中で男一人。その女たちをまぶしい目で見こすすれ、はたして僕に男同志の、ここまでの本音の会話があつたらうか。フェミニズムに対する男の義務や責任感のような非主體的な集團の、苦痛や無気力とはまるで異質の輝きを彼女たちに感じたのは、羨望という僕のオトコ性の本音であるに違いない。

男は死ななければ治らないくらい重く病んでいる。この病人の気持ちを本当に理解するのは、やはり男自身でしかない。

(この合宿の後、谷口さんは、受講中の同志社大//女性学//講座で案外消極的な女たちに業をいやし、自ら呼びかけ人となって合宿を計画、実行！)

声

◆「照射ベビートフードを追及する親の会」では、今年から継続的に健康診断することになりました。今年は9月ごろに各自ができるだけ近い病院で受診します。

昭和49年6月—53年9月に粉末ベビートフードを食べさせた記憶のある方は至急ご連絡ください。広島原爆の64倍のコバルト60を照射されたものを食べた（しかも生後まもないころ）のは世界で初めてです。この事実をどう受けとめ、どう行動に結びつけていくか、まだ試行錯誤の段階ですが、とりあえず食べた子どもたちの体を知っていきたいと思っています。国はこの事件を闇に葬り、原子力の平和利用として核を推進しようとしています。

（東京都葛飾区水元4—10—20 外池良子）

◆参院選の比例代表制の結果を見て、3年後には「日本女性党」を八あごらVを中心に結成したらイケルと思いました。雇用平等法や平和憲法のための近道かもしれませんね。

（名古屋 高橋ますみ 40代 文筆業）
◆7月上旬から9月下旬まで国際会議（科学

思想史）出席のため4年ぶりに海外（主にカナダ）に出かけます。先月の第1回国際フェミニスト会議での斉藤さんの話と八あごらVの方々の活躍はよかったですね。『ミニ』の記事を期待しています。私は常に「創造的な研究者」であることを目指しております。

◆私、この6月で会社をやめました。ほんの小さな会社ですから、やめたことに何の未練もありません。むしろこれから好きな勉強ができると思うとうれしくなります。少々貯えはありますが、いつまで続くかわかりませんのでパートの仕事をしています。時間的にちょっと余裕ができましたので、八あごらVの皆様と交際したくペンをとりました。細く長いおつきあいを、ということで、月に2回か3回、葉書でいろいろなことを話し合いたいと思うのです。どなたかペンフレンドになって頂ける方、おはがきください。

（〒274 船橋市高根台1—1—5—111 鈴木詠子 40代）

◆私も地方に住む者にとって、東京でのイベントや集会などの記事がとてもうらやましく思えます。地方は地方なりに頑張るしかありませんが。（下関市 田中美春 20代）

◆全国にもっとたくさんさんの拠点ができればと思う。できれば県に一つは。そして読者としてのみつながるのでなく、地域でまず仲間をふやしていききたい。そのためには各県ごとの名簿があればよいと思う。『ミニ』は名の通った人の文やインタビュより、ふつうの読者の声をとりあげてほしい。拠点に入っていない人もかかわれる形にしてほしい。

（東京 野口淑子 30代）

◆50代、60代の読者の方々と何らかの交流を持ちたいと思います。戦前戦後を生きた女にとって、戦前戦後とは何であったか、若い女性に言い残したいことは何か、後続の女性たちにしてあげられることは何か、女性問題の本質を、体験を通して見せたいと希っています。（逗子市 松原やす子 50代後半の主婦）

◆失業中で職業訓練校に通っています。経済的にも時間的にもギリギリで会費を払うことがいしかできず申しわけありません。八あごらVも大変だと伺っています。内容充実のために紙質その他落とせるものはどんどん落としてもいいじゃないの……などと我が身をふり返りつつ思ったりしています。当方は当面全経簿記検定1級をめざしていますが、ばってま。日商2級は合格。（東京 戸田明子 20代）

◆「あなたにあげたいと思って」と、ある方より頂く。おもしろい名前。2000円、高いと思ひバラバラ。「学ぶことの重さ」に目がとまる。今の私を代弁する手記。学ぶ権利が憲法で保障されていることを知る。あたりまえのことが憲法にわざわざうたわれている驚きと、正々堂々学べるのだという気持ちで、いま自分を知る学習をしている。自分を知ることということは、女の立場、社会を知ることとこのごろ気づく。婦人問題とか優生保護法などということばに今まで背を向けていた。一か月かかり、この74号を薬を服む如く読んだ。何のことはない、自分のことが書かれていた。家庭、生命、ボランティア、生き方、子どもなどなど……。少し足が地についたような感じがした。どの記事も内容のあるすばらしいものでした。いまの私、自分を恐れずに出していくことが自分の成長と思ひ、がんばります。ますますよい『あごろ』にしてください。

(東京 林レイ 30代 洋裁)

◆アツと驚きました。新しいミニ、ハンディでちょっとしゃれた感じもあって新鮮です。6月5日に決まって25日にもう届くとはみこ

となお手ぎわ。ウーンです。まこと善は急げですね。

内容充実していて読みやすく親しみやすく言うことありません。ただしハ女のつどいVは終わったものが半分以上。各地でこういうものがあつたという記録なのか、都合ついたら行ってごらんないよ、というお誘いなのか……。発行の日を考えて、できれば行くことができるような催しをのせてほしい……。ハあごろさつぽろVの手書きページもおもしろいですね。(東京 半田たつ子 編集者)

◆新サイズは読みやすいのですが、何となく私の(あごろ)のイメージに合わないのです。版が小さいからか、存在感が薄い感して……。

(埼玉 嶋末和子 30代 製図)

◆読みやすくなり、うれしく思います。ハンドバッグに入りやすく、電車の中でも読みやすいのです。これからも期待し楽しみにしています(埼玉 八木美枝子 20代 会社員)

◆選挙の翌日に投票を呼びかけた74号が着きました。「ミニ」にどんな役割があるか……。毎号すみからすみまで目を通しては来たのですが、今号ぐらになると、それもなかなかしんどいわけで。(京都 片岡陽子 40代)

◆内容は刷新という感じがなく、2000円は

割高のよう。本誌のつなぎ的要素をもつ情報誌とするならば集金日程前に入手したいし。今のままでは中途半端で魅力がない。

(東京 石川由紀 30代 会社員)

◆サイズ、値段、ページ数、採算のとれるものでよい。発行日を厳守してほしい。本誌の読書室、切抜帖、あごろのあごろ、適宜掲載を考えてください。ハあごろさつぽろVきれいな字ですが目が疲れる。活字でお願いします。

(牧野靖子 50代 無職)

◆あつ、と驚きました。やっぱり……。体裁がとてよくなくなってうれしくなったのは私だけではないでしょう。前のはパンフでもなく小冊子でもなく中途半端な面があつたように思うのですが、今回はとても安定感があります。これで人に読んでももらえる、そんな喜びさえあります。次号からを期待しています。

「結婚改姓を考える」、改姓に対する無意識の自覚、肯定、不快などは、度々聞いてききました。そしてその繰り返しに少しばかり飽きがありました。改姓よりも、なぜ「姓」「名」の存在にこだわってみないのでしょうか。生まれの時に得た「姓」そのもので社会的に差別をされながら逃れたいと思っている人間もあるのに。

(京都 稲垣良代 20代 織物)

苦しいのデース

<あごら>の財政

あなたも1人、購読者をふやして下さい

——事務局から——

月額500円は安くても、年間6000円は高い……。でも購読料が含まれているので、すから、他の会費に比べれば格安。このため、あごらVは実質的には会費だけでは支えきれず、有志の負担は増える一方で。

雑誌『We』の場合は、編集部員に月給が支払われていますが、『あごら』は無給。多くのボランティアで何とか支えています。制作と資金づくりの両面を支えるのは非常に困難です。定期購読3000人になれば何とか維持できます。地域の図書館や公民館、高校以上の学校図書館に常備する運動をぜひ！「名前だけを知っていて実物を知らない」方、多いようですので、婦人学級等でも実物を見せて、1人でも新規購読者獲得を……。上半期は65万円の赤字でした。この赤字は

83年度6月決算

収入の部	497,000
前年	2,736,250
本年	132,910
会費	(3,366,160)
本著	429,452
図便	—
手委	10,900
創可	689,520
受受	9,940
広広	2,000
大雑	19,172
雑受	36,260
寄	84,250
	30,500
	9,840
	44,000
	—
	—
	1,250
	2,984
	6,268
収入計	4,742,496
期首	6,734,640
期末	5,687,851
(差引)	△1,046,789
当期利益	△650,078
前期繰越	△6,064,031
当期繰越	△7,760,890
前期繰越	9,412,428
当期繰越	169,000
前期繰越	9,581,428
前期繰越	115,501
当期繰越	9,780
前期繰越	105,721
当期繰越	
支出の部	1,848,514
印刷	667,000
編集	71,500
刷送	461,680
局務	116,900
事務	225,080
印刷	217,885
局務	750,000
事務	6,600
印刷	65,585
局務	99,065
事務	52,850
印刷	7,280
局務	56,600
事務	420,000
印刷	198,535
局務	30,035
事務	31,635
印刷	12,380
局務	2,000
事務	1,250
印刷	10,200
局務	—
事務	—
支出計	5,352,574
収入計	4,742,496
収支差引	△650,078

●「あごら」販売員募集！

地域や職場で『あごら』を売る方。10部以上10%、20部以上20%、50部以上30%、手数料が出ます。

あごら読書室に「れらはるせ」オープン

「れらはるせ」とは、スペイン語で「りらつくす」の意味。からだの
コリをはぐして心の緊張も解こうという、ご存じ田中美津さんのクリ
ニックです。絶妙の会話ブラス、ハリ・キユウ・電気照射など、効果
バツグン。何より治療者に祈りの心があるのがうれしいこと。
何となくからだの調子が悪い方、出産・中絶後の不調、生理痛、お
子さんのおネショなど、ぜひぜひお試しを！ 電話予約制です。

自転車で平和アピール

サリー・オウィールさんを囲む会

8月19日、あごら読書室で、オーストラリアの平和運動家、サリー・
オウィールさんを囲み、オーストラリアの平和運動を支えるフェミニ
ストたちの活動について話を聞きました。(通訳は帰国中のヨシエ・



世界自転車平和部隊のメ
ンバーとして、反戦反核
を訴えながら世界各国を
愛車でめぐるサリーさん

ゴードンさん)。原水禁大会で大活躍のレベ
ッカ・ジョンソンさんや、ＩＦＪのパーバ
ラさん、カロララさんなど外国人も約半数
参加。フェミニズム運動と平和運動、エコ
ロジー運動が完全に一体になっているヨー
ロッパやオーストラリアに対し、日本の女
性運動はなぜ他の運動とリンクしないの
か、各女性グループの反目も激しいようだ
が、など、世界の第一線で活躍中の女性た
ちから率直な疑問も出され、熱のこもった
討論になりましたが、時間切れで残念！

元始、女性の実に太陽であつた

平塚らいてう 著作集全七巻

編集委員 大岡昇平・菊田ひさ
古在田重・小林登美枝・栗原
生・丸岡秀子・米田佐代子

明治・大正・昭和の三代をつうじて、
生涯を女性解放と民主主義のためにささ
げた、らいてう八五年の軌跡。

●第2回配本 46判貼面入 3000円

②母性の主張について

同時代のスウェーデンの女性解放思想家エレン・ケイとの出会い、
奥村博史との恋愛、共同生活・出産の体験をつうじて自己の思想として「母
性主義」を確立してゆく。女性史上有名な手塚野子との間に交された「母
性保護論争」の発端となる発言をはじめ、貴重な資料を収録。

●第1回配本・絶賛発売中 46判貼面入・3000円

①青春と豁

日本の近代婦人運動の源流となる青鞿社時代
の著作を収録。らいてうの思想の原点を示す

●第3回配本 10月10日発売 46判貼面入・3000円

③社会改造に対する婦人の使命

日本最初の婦人多数派要求を行うなど、婦人運動史上重要な論文を収める
●続刊
④ひろく性を礼拝せよ(83年12月)／⑤婦人戦線に参加して(84年2月)／⑥娘
に母の遺産を語る(84年4月)／⑦私は永遠に失望しない(84年6月)



大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話 03 (813) 4651 (代番)

『子どもがあぶない(仮題)』——原稿募集!

子どもたちが荒れている。そして大人も……。これを「教育の荒廃」と受けとめて、「学校が悪い」「いや母親が悪い」と言い合うだけでいいのでしょうか。その間にも事態は刻々悪化していく……。何が問題で、どうすればいいのか、真剣に考えたいと思います。秋の特集、あなたの心からの声をお待ちします。

◆論文Ⅱ400字30枚程度◆手記Ⅱあなたの周辺の起こっていることを具体的に。10枚程度◆現場レポートⅡ20枚以内。できれば資料、写真も。◆インタビューⅡ子どもの問題を考え実践している方を訪問。6枚と写真◆書評Ⅱ1枚程度

●締切Ⅱ10月20日必着●宛先Ⅱ東京都新宿区新宿1の9の6あこら編集部
●謝礼Ⅱ論文1篇3万円、手記・インタビュー15千円、ルポ1万円のあこら図書券

9月28日(水)アメリカ女性運動最新情報を聞く集い
あこら読書室で6時半から。アメリカの活動家を迎えての懇談会です。通訳つき。

あこらの

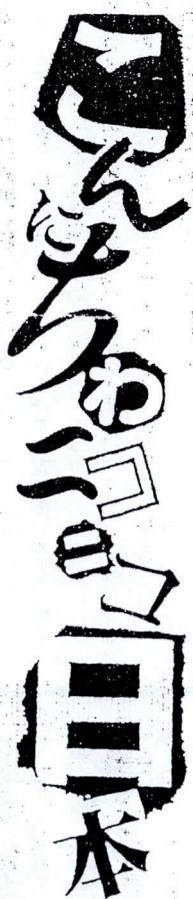
ピンチのへあこらVです。何とか財政を助けない。

財政を救おう!

みんなでこの広告費を拠出しました。

あこら京都

劇団東演公演 No.58 「83パラータ隔月連続公演その5」



山田民雄/作 原孝/演出

9月6日(火)↓18日(月)・下北沢東演パラータ・20000円

△出演▽

岩城 和男
井上 由起夫
米津 高明
津田 英三
加藤 秀一
土方 優人
山田 珠子
矢野 泰真
腰越 夏水
瀬戸 内愛
田村 由紀子
片山 由紀子

劇場小楽しい観て

切符 03 (419) 2 8 7 1

劇団東演

〒155 東京・世田谷区代田1-30-13 TEL 03-419-2871

〔編集後記〕

暑い夏でした。お元気ですか。残暑まだ猛け
猛けしいなか、//暑い//号をあえてお届けし
ます。汗を拭き拭き、みんなでテーブをほ
きました。その1人、下関の森川万智子さん
のおたよりに、「繰り返し繰り返し聞くうち
に、やっとその人の言いたかったことがわか
りました」とありました。「今まで何げなく
読みすごしていた集会報告の蔭のご苦労に気
がきました」とも……。きれいな字でま
められた森川さんや志岐さんの原稿を読み
ながら、この方々と「障害者」とのかかわりが、
長く深いことを改めて感じました。

(R)